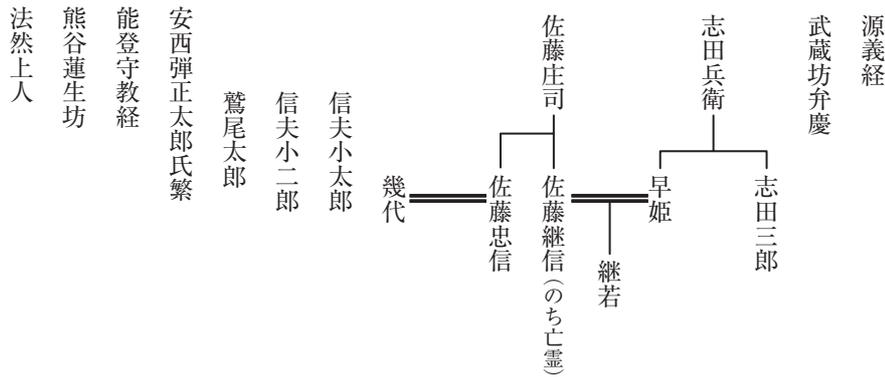


尾口のでくまわし 門出ハ島

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

# 門出ハ島

「門出八島」 主要登場人物



あらすじ

源義経が、兄頼朝と力を合せ、平家との戦のために奥州藤原秀衡のもとから大軍を率いて出立するときのこと。見送りに出てこない家を不審に思い弁慶がとがめると、平治の戦で義経の父義朝に味方して功を挙げながら讒言により領地を召し上げられた志田兵衛の子三郎である名乗り、父の遺言により一行に加わることはできない、と断わったうえで、その代りにと、出羽の国佐藤庄司の息子継信・忠信兄弟を推薦した。これを知った兄継信も弟忠信も、自分が戦いに行くために、お互いの恋人にウソを話して引き止めさせようとし争いになるが、最後は父と義経のとりなしにより二人とも義経の一行に加わることになった。しかし、新参の彼らが義経に重用されているのを不愉快に思う安西弾正太郎氏繁がなにかと言いがかりをつけてきて、佐藤兄弟と争いになりかけるが、志田三郎が仲裁に入り、一行は西国へと出立していった。

父の佐藤庄司は二人の息子のために鎧を新調し、信夫小太郎・小二郎兄弟に戦場まで届けさせた。八島に着いた二人は、この地の狩人の息子鷺尾太郎と名乗る草履売りから各陣所の説明を聞き、そのお礼に彼を佐藤兄弟の家来に推薦した。翌三月十八日の戦いで、継信は、義経の身代わりとなって、平家方の能登守教経の矢を受けて戦死してしまっただ。

その夕方、継信の忠勤に感動した義経の命により、忠信と信夫兄弟は継信の死骸を探し、舟のかけに重傷を負って虫の息になっている継信を見つけ本陣に運び込む。一方、継信に遺恨のある弾正氏繁は、鷺尾が敵に通じたと訴え出るがすぐにウソがばれ追い出されてしまう。諸大将が列座するなか、継信は義経の膝に抱かれ感謝の言葉をかけられ、忠信に遺言を残して八島の磯の波とともにはかなく死んでいった。

忠信は父母の嘆き思って継信の戦死を知らせなかった。継信の妻早姫には一子継若が生まれていたが、松が血のように赤くなるなど不吉なことが続くので心配になり、兄志田三郎と西国へ出かけていった。偶然宿ったところが鷺尾三郎の姉の庵であり、ここで継信の戦死のことを聞く。志田三郎が様子調べるために留守にした間に、早姫はうたた寝の夢のなかで、修羅道でなお平家と戦い続ける継信の亡霊と対面する。やがてもどってきた志田三郎や忠信から真相を知り早姫は悲しみにくれる。とそこへ、安西弾正が駆け込んできたので、志田は地獄落として殺してしまう。

その後、法然上人により、新黒谷で継信の追善供養の仏事が執り行われた。義経の代参として源広綱が詣で、早姫、継若をはじめ、志田三郎、熊谷蓮生坊らも参詣した。法然が念仏を称えると、虚空に継信がたちを現し、今日の供養により修羅の苦患をまぬがれたと叫び、仏体となって西の空へ飛んで行った。



東二口



深瀬

- ① 古浄瑠璃のはじまりによく使われることば。
- ② インドの人で、仏教を開いた人。
- ③ 釈迦のいとこで、釈迦の弟子になったが、後に背いて釈迦に危害を加えようとして失敗し、死後無間地獄(＝絶え間なく苦しみを受ける地獄)におちたという。
- ④ 中国の人。儒学をはじめた人。
- ⑤ 古代中国の大泥棒の名。孔子との架空の問答が「莊子」に載っている。
- ⑥ てごわい敵。
- ⑦ 文化的な方面と武力的な方面。
- ⑧ 源義経。義朝の九男。幼名牛若丸。義経は源義朝の八男であるが、にもかかわらず九郎と称するのは、叔父の為朝が「鎮西八郎」と名乗り武名の誉れが高かったのをばかっていたため。原文「かねうりよし次(つぐ)」。一般には金売り吉次(きちじ)として知られる。奥州の黄金を京都で商って長者になったという、伝説的な人物。鞍馬で知り合った牛若丸を平泉の藤原秀衡のもとに連れて行ったとされている。
- ⑨ 磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥五カ国の古称。現在の青森・岩手・宮城・福島にわたる。
- ⑩ 藤原秀衡。陸奥の豪族。平泉に住み、源義経をかくまひ、源頼朝に対抗した。
- ⑪ 手助け。
- ⑫ 源頼朝。治承四年(一一八〇)、以仁王の令旨を奉じて平氏追討の兵をあおり、勝利して鎌倉幕府をひらき、初代将軍となる。
- ⑬ その地位、役目にあさわしい能力・人柄。
- ⑭ 生まれつき。天性。
- ⑮ 敵の出兵を予想した準備。
- ⑯ 金属片が風ですれあつて涼しげに鳴るようす。多くの兵が移動するときのようすをあらわす。
- ⑰ 牛や馬など、家畜の世話をする少年。
- ⑱ 21きこり。
- ⑲ わらぶきの家。
- ⑳ すみのかくれて見えないところ。
- ㉑ 六尺(約一八〇センチ)は十分ある。
- ㉒ やじり。矢の先に付けた鉄製のところがった部分。
- ㉓ 十六歳。
- ㉔ 着物を縫う。「つづり」は、布を縫ぎ合わせた粗末な着物。
- ㉕ 針の目。めど。
- ㉖ 運針のとき、ぬい針を押し進めるのに使う指輪。
- ㉗ 器用なこと。
- ㉘ ゆつたりとしているようす。
- ㉙ 義経の家来で、最後まで忠実に付き随った僧。
- ㉚ 陸奥の郡の数。陸奥国のこと。
- ㉛ (義経の)徳をおおきしたうこと。

## 門出八島 初段

① さてもそののち、「② 釈迦に③ 提婆あり。④ 孔子に⑤ 盗跖あり。」⑥ 国に強敵あらずんば、⑦ 名將の⑧ 誉れ、何をもつてかあらわれん。されば⑨ 乱は⑩ 太平の⑪ 始め。

⑫ 文武盛んの⑬ 源氏、⑭ 九郎御曹司義経は、⑮ 金売吉次に⑯ 従つて、⑰ 陸奥に⑱ 下向あり。⑲ 秀衡が⑳ 助成にて、㉑ 頼朝に加わり、㉒ 平家の逆徒を鎮めんため、㉓ 奥勢十万余騎を㉔ 引率し、㉕ 前進発とぞ聞こえける。

㉖ およそ三軍をつかさどるご器量、㉗ 天然その徳そなわつて、㉘ ぞなえ・㉙ 行列・貝・太鼓、㉚ 鏜鏜凄凄として、㉛ 金鉄、皆鳴るご陣おし、㉜ 牧童樵夫も頭をたれ、㉝ 草木も枝をかたぶけり。

㉞ ここに荒れたる藁屋が軒、奥も隈なく見え給えば、六尺ゆたかの大の男、矢の根をとぎて、かたえには二八の娘つづりさす、針のみみずも指貫きも、手きき手づまの手もたゆし。

㉟ 武蔵坊弁慶きつと見て、門外につつ立ち、  
「今日、わが君のご出陣。五十四郡の民百姓、渴仰申す折柄、

「釈迦に提婆あり。孔子に盗跖あり」

ということわざがあります。お釈迦様には仏法に反対する提婆という弟子がいました。また、孔子さまにも、大泥棒の盗跖という弟子がいました。このように、どんな偉い人にも必ず獅子身中の虫というべき困った存在がいるものなので、国家にもまたそういう敵はつねにいるのです。が、そうであればあるほど、反対にまた、すぐれた武將もあらわれ出るといふものです。世の乱れは、天下太平の先触れでもあるのです。

文武両道に秀でた源氏の御曹司九郎義経公は、金売吉次につき従い、陸奥に下り、藤原秀衡の援助によって兄頼朝軍に加わりました。そしていま、平家一門との戦いのために、奥州の軍勢十万余騎を引き従えて、いよいよ御出発であります。この義経という方は生まれつき、三軍をつかさどる人間としての御器量が身に備わっておりますから、付き従う軍勢の行列は、ほら貝や太鼓を先頭に、軍勢が身あたりにおだまし、その音には、牧場の牧童も山のきこりも頭を垂れ、まわりの草や木もまた、枝を傾けて聞き入るほどでありました。さて、ここに、荒れはてた藁ぶきの家があ

①家において落ち着きはらっていること。  
②無礼者。

③尊いものとしてうやまう。  
④よろいかぶと。

⑤「へちまの皮とも思わない」の略。なんとも  
思わない。  
⑥自分のものが一番尊い。

⑦源頼朝の御家人として登場。モデルは津戸三郎。

⑧前々から聞いていた。

⑨代々の家臣であること。

⑩組んで。

⑪偉い人の命令。

①おさめ過ぎたる振舞、慮外千万。まかり出でて、一礼せよ」

と呼ばわれれば、かの男くつくつと笑い、

「いやはや、長生きすれば新しいことを聞く。主を持たぬ浪人

なれば、わが君とあがめん人、天が下には覚えぬ。具足着たが

怖くもなし。誰に恐れてへちまの皮。わが寺の仏とうといな。

志田の三郎勝平という浪人もの。この女はわが妹。身こそ貧な

れ、今日まで、人に礼せぬこの男」

と、両足ぐつと投げ出し、膝をたたいていたりけり。

弁慶こらえず、すねふみ折らんとかけ出する。義経、馬より

飛んでおり、

「ああ、しばらくしばらく。志田の三郎とは聞きおよびし源氏

譜代の勇士ぞや。われこそ義朝が八男よ。西国へ同道せん。力

をそえて得させよや。平に頼む」

との給えば、志田兄弟走り出で、

「さては源氏の御末か」

と、手をつかねて申せしは、

「まことに源氏の大將の、『頼む』との御説。御供申すべく

ります。入口に立つてのぞくと、奥の方もすぐに見わたせませす。中には、六尺（一八〇センチ）にも達しようという大男が、矢の根を研いでおり、そばには、十六才くらいの娘が縫い物をしています。針仕事をすると手先も指ぬきもゆつくりとした様子です。

武蔵坊弁慶は、その様子を見届けてから、門の外に突つ立って、声をかけました。

「今日は我が君義経公御出陣の日じや。奥州五十四郡の民百姓は、みな喜びいさんで出陣の様子を見物するため出てきているのに、この家だけは知らん顔の様子なのは不届き千万外に出て挨拶くらいせぬか」

そう言われて、この大男はくつくつと笑いながら、

「いやはや。長生きをすると珍しいことを聞くものじや。わしは主人を持たぬ浪人、じやよって、『我が君』とあがめ奉らねばならぬようなお方は、この世の中には一人もおらぬ。いくら鎧兜を着けた侍じやとて、この私には怖くもなんともない。誰を恐れてこんな暮らしを立てていると思うか。自分の主君だけが偉いなどと思ひこむでない。わしは、志田の三郎勝平という浪人者。ここにいるこの女はわしの妹じや。貧乏はしていても、今日まで人にむやみに頭を下げたことなどないわ」

と、両足をぐつと投げ出して、膝を叩いております。

弁慶は我慢がならず、この男のすねを踏み折ってやろうと駆け出すのを、義経公は、馬

- ①手柄に対し、主君が金品や土地などを与えること。  
 ②その人をおとしられるためにあることないことを告げ口する人。  
 ③代々伝えられた土地。

- ④深く心に刻みつけられていて。  
 ⑤だまっておいておけない。  
 ⑥「八幡大明神に誓ってまちがいはなく」の意。  
 ⑦絶対。  
 ⑧親に対する義理。

- ⑨すじみちをたて。  
 ⑩遠慮なく。  
 ⑪もつともなこと納得なされ。

- ⑫旧国名。今の山形・秋田両県の大部分。  
 ⑬人の名をはっきり言わないときに使うことば。  
 ⑭平泉の藤原秀衡の家来。  
 ⑮継信。  
 ⑯命令にそむくこと。

- ⑰そういうことならば。  
 ⑱義経の家来たち。

そうらえども、親にて候う志田の兵衛、御父義朝公につかえ、

品品の高名恩賞あるべきところに、讒者のわざにて本領をめし上げられ候う。父が常常申せしは、『源氏の賞罰暗きゆえ、讒者は栄え、忠臣はおとろうる。ああ、うらめしの義朝や。この

うらみは子孫まで忘るるな』と申しおき、腹切つて相果てし、親の一言骨髓にこたえ、もだされず。かく申すとて神八幡、平家に従う所存なし。土をなめ、水を飲み、飢え死せんこそ、孝行

とも義とも我がも申すべし。御誕をそむくにあらねども、ご奉公はごめんあれ」

と、理を正し、はばかりなくこそ申しける。

義経、至極ましましたし、

「しからは次に劣らぬ武士を頼んでえさせよ」

志田うけたまわり、

「ここに出羽のなにがし、佐藤庄司と申すもののせがれ、継信

・忠信兄弟の内、一人頼むとのたまわば、よも違背は候うまじ」

と、言上すれば、御大将、

「その義ならば、軍兵を亀井・片岡、武蔵につけて先へうたせ、

から飛び降りて、

「いや、しばらく待て。志田の三郎といえ、かの有名な、源氏譜代の勇士のことではないか。私は、源義朝の八男義経だが、わしといつしよに西国へ同道して、私の力になつてはくれぬか。ぜひに頼みたいのじゃ」

と丁寧にお願ひしますと、志田兄妹は走り出てきて、手を揃えて挨拶をしました。そして、「源氏の御子孫にあたる方でしたか。そのように、丁寧な源氏の大将殿が頼むとおっしゃれば、御供いたしたいのはやまやまでありませんが、ただわが親志田の兵衛は、御父君の義朝公に仕え、多くの手柄を立て、しかるべき恩賞を受けるところ、讒言する者があつて逆にもとの領地を召し上げられてしまいました。父は『源氏方の賞罰が不充分であつたため、讒言したものが栄え、忠臣が衰えるという結果になつたのだ。ああ。怨めしい義朝公。この恨みは子々孫々に至るまで忘れてはならぬぞ』という言葉も私どもに残して、腹を切つて死んでしまいました。この親の言葉は私ども兄妹の骨髓にしみ込んでおりますので、いまの義経公のお言葉にすぐに『はい』とは答へられないのです。しかし、だからといって、平家方につこうというのではもちろんありません。それは神に誓つても間違ひありません。が、土を嘗め、水を飲み、飢死したとしても、親の遺言を守るのが孝行であり義でありませぬ。ご命令に背くつもりはございませんが、一行に付き従うことだけはお許しください」と、理路整然と、しかし、義経公だからとい

① さそう。

② 旗の上部の風になびくところ。旗頭。  
③ 鎧の飾りの錦もあてやかに。

④ 手柄をたてよう。

⑤ 自分。

⑥ 絶対に大丈夫ないい考え。

⑦ うかがいました。現在の「こんにちは」にあたる。

佐藤が館の案内には、なんじを誘引すべし」

とて、二手にわくる旗の手に、鎧の錦におわせて、弓馬の花こそさかりなれ。

さるほどに、佐藤兵衛忠信は、このことを聞くよりも、

「嬉しや義経の御供し、西国におもむき、高名せんと勇めども、

兄弟の内一人とあるからは、兄の継信、御伴を望み、よもそ

れがしは上すまじ。ええ、屈強の分別あり。ぜひそれがしがの

ほらん」

と、志田が庵に案内し、

「四郎兵衛忠信、お見舞申す」

と言い入るる。

妹の早姫立ち出で、

「兄上は義経公の御供し、その方へ」

と言う。

忠信小声になり、

「いや、三郎殿に用はなし。御身に内証を知らせ申すことあり。

うけたまわれれば兄継信とは人知れず夫婦の語らい、浅から

つて遠慮することもなく申し上げました。

義経公はこれを聞いて納得し、

「よし、わかた。では、汝に劣らぬほどの武士を教えてください。そのものをかわりに家来として連れて行こう」

と言いますと、志田は承知し、

「この近く、出羽国の佐藤庄司と申す者の伴に継信・忠信という兄弟がおりますが、そのうちの一人を連れて行きたいと言えば、決して背くことはないでしょう」

と申し上げました。御大將義経は、すぐに、「そういうことならば、亀井片岡らを先に遣わして、佐藤庄司の館へは、そなたが案内してくれぬか」

と言って、二手に分けて、出羽国に向かいました。その旗のかざりや鎧の錦もはなやかで、弓馬の道はまことにすばらしいものです。

このことは、すぐに弟の佐藤兵衛忠信の耳に入ってきました。

「これは嬉しい、義経公のお供をして、西国に赴き、手柄を挙げよう」といくら勇み立つてみても、兄弟のどちらか一人というのであれば、兄の継信がまず御供を望み、弟の私を行かせようとはしないだろう。が、よい計画を思いついたぞ。絶対に私が西国に行つてやるぞ」

というので、早速、志田の庵に出かけ、案内を乞い、

「四郎兵衛忠信が参りました」

と言いつつ入っていきました。妹の早姫が出てきて、

⑧ あなた。

⑨ 内々の話。

① つつみかくす方法はない。  
② お腹に子をやどしている。

③ みなに知られましたか。

④ お供としてつれていく。

⑤ きりがいい。  
⑥ たちのわるいこと。とくに酒色にふけることについて言う。

⑦ 正妻のほかにやしなうて愛する女性。

⑧ 話し合い。

⑨ この世だけでなく死後のあの世でも夫婦でいようという約束。

⑩ 気の毒さ。

⑪ 一心に。

⑬ ありがたいことだ。

ぬ仲と聞いてあり。何とそうか」

と言え、早姫顔をあからめ、

「ごぞんじの上はつつみ申さんようもなし。はや七月の身も重し。してこのことがあらわれしか」

「いやいや、さようの義ではなし。義経公より『兄弟の内、一人具せらるべき』との仰せに、兄継信、いくさのともを望まる。

あかぬ別れは武士の道とおほさんが、弟の口から兄の悪性申しにくきことながら、ここをよく聞き給え。継信『上方へ上

りなば、国へは討死といつわり、京女の妾をこしらえ、いくさは半分色遊び』と、家来信夫の小太郎に、談合ありしを確かに聞く。しかれば、二世の御ちぎりすてられたまわん笑止さに、

そつと内証を知らせ申す。ここは平にとめ給え。いくさのともには弟の役。不肖ながら、はて、それがしがまいろうまで」

と、真顔になつてぞ語りける。

女心の早姫、涙も胸に保ちかね、

「よくぞお知らせかたじけなや。さようのことを聞くからは、すがりてもひきとどめ、西国へやりはせじ。何とぞ継信殿に会

「兄上は義経公の御供をして、そちらのお宅に向かったはずですが……」

と言います。が、忠信は小声になつて、

「いやいや。三郎殿に用はない。内証でそなたにお知らせしたいことがある。さて、聞くところによると、そなたと兄の継信とは人知れず夫婦の契りを結んだ深い仲になつてゐること、それに間違ひはござらぬな」

と聞くと、早姫は顔を赤らめ、  
「御存じならば、隠してもしようがありません。私はもう七か月の身重の身になつております。が、そのことが皆に知られたのでございますか」

「いやいや、そうではない。義経公より『兄弟のうち一人を連れて参る』という仰せがあったので、兄継信が軍のお供に行くことを望んだのじゃ。夫婦が別れ別れになるのは武士道の常。とはいえ、弟の口から兄の悪口は言いくいことなのだが、ここところはそなたにとつても大切なところ、よく聞きなされ。継信が上方へ上つたならば、『国もとへは討死したと偽つて、京女の妾をこしらえ、いくさは半ばで抜け出して色遊びにふけるつもり』と家来の信夫の小太郎に話していたのを確かにかこの耳で聞きました。となれば、そなたとかわした夫婦の契りも反故にされてしましますぞ。それが気の毒だと思つて、そつと内証で知らせに参つたのです。こうなつては、せひとも兄君の西国行きを止めねばなりませんぞ。いくさのお供は弟のこの私がつとめます。私が行けばすむことですからな」

① ください。

② それならば。

③ ともかく。

④ むちゃくちゃに。

⑤ 人間は岩木を分けて生まれたのではないから、人情を知っている。

⑥ かならずそうなると決まっていること。

⑦ このようである。

⑧ 氏の先祖の霊を神としてまつたもの。

⑨ 神に供えたり、はらえにささげもつたりする道具。木綿・麻などの白い布や紙を細く切ったものをたばねて作る。

⑩ さしあげ。

⑪ 雲の上までも高く。

⑫ 松島明神の俗称。宮城県宮城郡松島町にある紫神社の通称。祭神は天御中主神(あめのみなかぬしのかみ)。旧称、村崎(むらがさき)明神。

⑬ 一生懸命なさま。

⑭ 「木綿(ゆう)」は神(さかき)につけて神にささげるもの。「ゆうだすき」は「木綿」で作ったたすき。ここでは、次の「優」を言い出すための語。

⑮ しとやかで。

⑯ 神社など、神聖な場所を囲む垣根。

⑰ 袖をひきとめ。

⑱ もしもし。

⑲ 怪しいもの。

⑳ わたし。へりくだった言い方。

㉑ 神社にいて神事を行う人。かんぬし。

わせてたべ<sup>①</sup>

と泣きければ、

「しからばそれがし会わせ申さん。何がなしにとりついて、め<sup>④</sup>

ったむしように泣きたまわば、岩木を分けぬ継信、思いとまる

は必定ぞ。ただ、泣き給え泣き給え」

と、連れて宿所に帰りけり。

かくとは知らず、三郎兵衛継信、氏神の社に詣で、ぬさたて

まつり礼拝し、

「源氏の大将ご出陣。願わくはそれがしを御供に具せられ、神力

をもつて高名し、誉れを残す雲の上。南無や紫明神」

と、肝胆砕くゆうだすき。優にやさしき女の声。斎垣の内より、

「継信様、継信様」

と、呼びかくる。

はっと驚き、

「何もの」

と言え、立ち出で、袖をひかえ、

「いや、申し、お気づかないものではなし。わらわは当社の神職、

と、真剣な顔をして話しました。継信を慕う早姫は、こんなことを聞かされてはもう我慢ができません。こらえきれずに涙を流しながら、

「よくぞお知らせくださいました。ありがとうございます。うございませう。そのようなお話しを聞いた以上はすがりついてでも引き止め、西国へやりはしません。なんとか継信殿に逢わせてください」

と泣きますと、

「では、わたくしが逢えるようにとりはからいませう。ともかく兄上にはすがりついて滅多やたらにお泣きになれば、人の情けはわかる継信のことですから、かならず思い止まります。ともかく、兄の前で泣き叫ぶのですぞ」と言い聞かせながら、継信のいる宿所に帰っていきました。

そんなこととはつゆ知らず、三郎兵衛継信は、氏神の神社に詣でて、幣をたてまつり、礼拝をして、

「源氏の御大将が御出陣なさるとのこと。願わくは、この私めを御供に連れて行ってくださいますように。そして、神様のお力によって、功名を立て、名譽の名を雲の上まで残しとうございませう。南無、紫明神」と、こころをこめて木綿襷をささげておりました。

さてそこへ、まことに優しい女の声で、斎垣のなかから、

「継信様。継信様」  
と呼びかける声が聞こえます。継信ははっと

①おとうと。

②おたがいにほれている。両思いの。  
③ほんとうに。

④京都やその近く。  
⑤遊里があるとこころ。  
⑥不安。  
⑦きちんとわかつてもらえない。  
⑧しつと。やきもち。

⑨この世だけでなくあの世でも親切は忘れません。

⑩ちようどよいとき。

⑪そのとおり。  
⑫しかし。  
⑬いさみたっている。  
⑭自分の意見に従わせようとしつこく言う。

⑮それぞれ。

行春が娘、幾代と申すものなるが、<sup>①</sup>ご舎弟忠信様と忍びてあい  
にあい惚れの、<sup>②</sup>神ぞいとしさかわいさは命も磯の上を越え、山  
を隔てて西国へ、義経様の御供を、望み給うとうけたまわる。  
<sup>④</sup>上方は色所。<sup>⑤</sup>心もとのう思われて、<sup>⑥</sup>恥を言わねば理が立たず。  
<sup>⑧</sup>りんき深きは生まれつき。兄ご様のご意見にて、とめまして  
たまわらば、<sup>⑨</sup>今生後生のご慈悲」

と、手を合わせてぞ嘆きける。

継信、折に幸いと、

「おお、道理道理。さりながら、<sup>⑬</sup>忠信血気盛んにて、<sup>⑭</sup>兄が意見  
は聞き入れず。御身すがりてかきくどき、ひたすら泣いてとめ  
給え。ただ泣き給え泣き給え」

と、教ゆるところへ、<sup>⑮</sup>忠信・早姫来たりしが、

「あれこそ兄よ」

「弟よ」

と、二人の女を面面に隠し置き、

「やあ、兄者人」

「ふふ、忠信か」

驚き、

「何者じや」

と問いかけますと、女の人が出てきて、継信  
の袖を引きながら、

「いやいや。ご心配なさることはありません。  
わらわはこの神社の神職行春の娘、幾代と申  
すものでございます。御舎弟忠信様と忍び逢  
うております。互いに惚れあつて、いとしい  
恋しいという仲でございますが、それなのに  
忠信様は海山を隔てた遠い西国へ義経様の御  
供としてついてまいりたいと望んでいるとの  
こと。しかし、上方は誘惑の多いところだ  
から、私は心配でなりません。恥を言わねば  
なりません、私の嫉妬深いのは、どうかお兄  
生まれつきのようでございます。どうかお兄  
様から御意見なさつて、西国行きを止めてく  
ださい。一生恩に着ますから、どうぞお願い  
です。」

と、手を合わせて嘆いております。継信はこ  
れ幸いと、

「おお。なるほど、なるほど。が、そうはい  
つても、忠信は血気盛んな男じゃから兄の意  
見は聞き入れまい。そなたがすがりついてか  
きくどき、泣いてとめなされ。あいつの前で  
ともかく泣くことじや」

と教えているところへ、忠信と早姫がやつて  
来ました。

「おお。兄がいる」

「弟がいる」

① けなげである。

② 神仏に願うこと。

③ 家を継ぐ予定の子。

④ 全部聞かないうちに。

⑤ あなた。親しんで呼ぶのに使う。

⑥ 根本。

⑦ 晴れがましいいくさ。

⑧ 「ず」は「しよう」とする、の意。

と、互いに知らぬ挨拶は、おかしくもまた殊勝なり。

しばらくあつて継信、

「このたびわが君、西国の御供、兄弟の内一人とのご誼。それ

がしまかり向かつて、高名すべき立願に参詣せし折から。なん

じは何とて来たりしぞ」

忠信聞きて、

「いやいや、このたびはそれがし御供申すべし。総領の身が討死

せば、誰が家を継ぎ申さん。総じて国を守るは上たる役。一騎

武者の働きは下たるものの役なれば、ぜひ忠信が御供」

とぞ申しける。

継信、聞きもあえず、

「おことが言葉も一理あり。さりながら、そちは若きものなれ

ば、さねかたまらず武者なれば、晴いくさおぼつかなし。国に

残つて父母につかえよ。今度は継信向かおうず」

と言え、忠信気色を損じ、

「『秋の木の実などにこそさねかたまる』ということあれ。『若

きものにて晴いくさがなるまい』とや。これ勝負は老少による

と、二人は、連れてきた女をそれぞれ隠し置いてから、

「やあ。兄上」

「ふふ。忠信か」

と、互いに素知らぬふりで挨拶をかわします。が、はたからみればおかしくもありまた殊勝なことでもあります。

しばらくして、継信が、

「この度我が御主君が西国へ出陣する御供に『兄弟のうち一人を』と御命令なされた。私が引き受けるつもりで、手柄を立てられるように参詣してきたのだが、そなたは、なんの用でここにやってきたのだ」

と言います。忠信はこれを聞いて、

「いやいや、今回は私が御供いたします。長男であるそなたが戦で討死したならば、誰がこの家を継ぎましょうか。一つの国を守り治めるのは上のものの役目、武者として戦うのは下のものがすべき役目でございますれば、是非この忠信に御供をさせてください」

と言います。継信はその言葉を聞くひまもなく、

「そなたの言うことにも一理はある。が、そちは年若いものであるから、まだ体の芯が固まっておらぬゆえ、しっかりとつとめをはたせるかどうか心配じゃ。よって、国もとに残つて父母に仕えるがよい。今回はこの継信が行こう」

と言いますと、忠信は腹を立て、

べからず。兄とは生まれ給えども、晴いくさはあぶなもの。ただそれがしを上せられよ」と、あざ笑うてこそ申しける。

継信腹にすえかね、

「晴いくさあぶなしとは。さてはそれがし、臆病すべきものと思うか」

「おお、臆病は目の前よ」

継信いよいよ腹を立て、

「臆病ものの弟なれば、なんじはなおも臆病ならん」

「のう、恥ずかしけれど、この忠信は、臆病すべきほどしなし。貴殿は国にほだされ、さてこそ臆し給うらめ」

「やいさ、うろたえもの。国に心がひかれんとは。わが親はなんじも親。もっては同じ理よ。」

「のう兄者人。親に親は変らねど、この忠信は、志田の三郎が妹、早姫というほだし持たぬ」

と言う。

継信はっと思えども、さあらぬ顔にて、

「『秋に木の実が実る頃に核が固まる』とはたしかに言います。しかし、若いから立派に戦えないとは言えないでしょう。勝負というのは年齢ではありません。兄に生まれたといえ、戦いとは危険なものでございますから、ぜひ私を戦いに行かせてください」

と、兄の言葉をあざ笑いながら言いました。

継信は、腹に据えかねて、  
「戦いに行くのが危ないなどと、わしのことを臆病者のように言うのか」

「目の前にいるそなたは臆病者ではないか」  
継信いよいよ腹を立て、

「わしが臆病者なら、その弟のお前はますます臆病にちがいない」

「いやいや、残念ながら、この忠信の方には臆病にならねばならぬような絆はもっておりませんのでな。そなたは、国もとに絆がありますゆえに、きつと戦では臆病風にふかれましよう」

「なんということを言う。国もとに心が引かれるなどというが、わたしの親はそなたにも親のはず。とすれば、同じことではないか」  
「なあ、兄上、親はたしかに同じ親じゃが、この忠信には、志田の三郎の妹早姫などという絆はおりませぬからな」と言うのと、継信ははっと思いましたが、素知らぬ顔で、

①自由を束縛するもの。

②あわてもの。

「ふふ、それは誰がこと。身に覚えなし」

と言えば、忠信ふっと吹き出だし、

「必定、覚えそうらわぬか」

と、姫の手をひき出でけるとき、継信、立って逃げんとす。

早姫すがりひきとどむ。忠信よろこび、

「そりゃ、そこが泣きどころ。泣け泣け」

と呼ばわれば、

「西国へは、のうやりませぬ」

とぞ泣き給う。

継信、赤面しながら、

「幾代、幾代」

と呼びければ、するすると走り出で、

「忠信様、わらわを捨てて西国へ行かんとは、お心も変りしか。

どうでもやらぬ」

とすがりつく。継信、

「そりゃ、そこが泣きどころ。早姫泣け」

「幾代泣け」

「ふふ。それは誰のことじゃ。聞いたことがない名じゃ」

とうそぶきました。忠信はぶっと吹き出して、

「ほんとにこの女に見覚えはありませぬか」

と、早姫の手を引いて出すと、継信は立ちあ

がって逃げようとしたが、早姫はすがり

ついて引き止めようとします。忠信は悦んで、

「それそれ、そこで泣くがいい。ほら、泣け泣け」

と早姫をあおりたてます。早姫は、

「西国へは、決してやりませぬ」

とすがりついて泣いております。継信は、顔を赤くしながら、

「幾代、幾代」

と呼びますと、こちらの方から、幾代がする

すると走り出てきて、

「忠信様。わたしを捨てて西国へ行くとは、お心変わりでもしたのですか。決してやりませぬから」

とすがりつきます。継信は、

「そりゃ、そこが泣き所じゃ。早姫泣け」

「幾代泣け」

①おつれして。

②ほかのこと。

③身にうける。  
④神仏の助力。

⑤強いこと。  
⑥さしあげよう。

⑦若い女性。

⑧近よりがたいほどに立派であるよ。

と、兄弟顔に袖おおい、花に鶯、時鳥、一度に持つ姿かや。ただ泣け泣け、とぞばかりなり。

かかるところへ父の庄司、君を供奉し、志田もろとも来らる。兄弟驚き、二人の女を隠さんとす。

「ああ、しばらく。苦しからず」

とおしとどめ、庄司申されけるは、

「やれ子供よ。君を御供仕り、これまで来ること余の儀でなし。

兄弟の内、一人頼みたきとの仰せをこうぶる弓矢の冥加、庄司が老のよろこびなり。『兄か弟かいずれ剛なるをまいらせん』

と思うところに、兄弟、義を重んじて争う心底。庄司が子供は

剛のもの。おお、頼もしし、頼もしし」

と、嬉し涙を流さるる。

「さてなんじらは忍び妻を持つたとや。情けに迷うはよきつわもののかせぞかし。二人の女郎嫁にとり、子供と思慰ま

ば、庄司は老の楽しみあり。この上は、兄弟ともに御供申せ」

とありければ、継信・忠信、よろこびて、勇む心のゆゆしさよ。

庄司、重ねて申さるるは、

と、二人は顔を袖で覆い、花に鶯や時鳥が来て、いっせいに鳴き始めるように、それ泣け、やれ泣け、といいあうばかりです。

そうしてもめているところへ、父の佐藤庄司が義経君のお供をして、志田三郎といっしよにはいつてきました。兄弟は驚いて、二人の女を隠そうとしましたが、

「ああ待て待て。そのままかまわん」

と押しとどめました。そして、庄司は、

「これ、わが子たちよ。君のお供をして、ここまで来たのは、他のことではない。兄弟のうち一人を伴に連れて行きたいという仰せがあつたからじゃ。まことに武士の誉れ、わしにとつても悦びじゃ。兄か弟か、いずれにしても剛なるものを遣わすことにしようと思つておつたところ、兄弟で義を重んじて争う二人の心根は、庄司の子供が二人とも剛のものである証拠。なんと、頼もしいことではないか」

と言つて、嬉し涙を流しておりました。

「ところで、二人とも忍び妻を持つておるとな。情に迷うのはよき武士の常、二人の上臈を嫁に取り、わが子と思ひ、いつくしんでおれば、心も慰み、老の楽しみにもなる。このうへは兄弟いっしよに御供を申せ」

と言いました。継信・忠信が喜び勇む様子はなんともすばらしいものです。

庄司はさらに言葉を継いで、

① 打ってきたえた武器。槍や刀。

② 世話をし指導して。  
③ たまえ、くしてください。  
④ 同僚。  
⑤ おしえ。

⑥ 忠義でないこと。  
⑦ するな。

⑧ 人の踏み行うべき道。  
⑨ 前後のことを考えず、むやみと敵に突進して  
いく武者。  
⑩ 後見として世話をすること。

⑪ 死に目。

「彼ら兄弟、心は剛にて、弓矢かきおい、打物とり、馬ひきよせてうち乗つて、敵に向かうそのときは、千騎万騎にも劣らぬものにてそうらえども、幼きより主を持たず、奉公の道を存ぜず。わが君へ任せまいらする庄司が心を察しあつて、御目をかけてめしつかわれくださるべし。ひきまわしてたべ、朋輩達。さてなんじらも、今が親子の別れなり。父が教訓を保つて、君に不忠つかまつるな。今日よりしては、庄司を親と思ふなよ。親にも主にも君一人。一命をたてまつり、身はなきものと心得て、よき敵と見るならば、おしならべてむずと組み、首とつて名を上げよ。仁義を知らぬは猪武者。兄は弟を介抱し、弟は兄にそむくなよ。ひくとも兄弟連れてひき、かくとも兄弟連れてかけよ。兄を討たせて、国もとの父や母が恋しいとて、弟一人帰ろうと思ふな。弟を討たせて兄帰るな。老いたる親さえ思ひ切る、今を盛りの若武者ども、心を残すな。今日の門出を末期と極め、いさぎよく討死にせば、生きて親子の対面より、なおしも嬉しかるべき」

と、涼しげには勇むれども、さすが老後の親子の別れ。さえぎ

「この兄弟は、強い心を持っており、弓矢を背負い刀を取り馬に乗って敵と戦うときは千騎万騎の武者にも劣らぬ働きをするものたちですが、幼いときから主君というものを持つたことがございませんで、奉公するということがどういふことかよくわからないのではないかと心配しております。義経公におまかせしますので、この父の気持ちをわかっただき、目をかけて召し使ってください。朋輩のみなさん、よろしくお引き廻しのほど、お願い申し上げます。

さて、おまえたちとは、これでお別れじゃ。父が教えたことを守つて、義経公に不忠なふるまいは決してするなよ。今日よりはこの佐藤庄司を親と思ふな。親でもあり主でもある御主君一人に一命をささげ、その身はないものと心得てお仕えるのじゃぞ。よい敵があらわれたならば、まっさきに出て、組みあい、その首を取つて功名を上げるのじゃ。仁義を知らねば、勢いがいいだけの猪武者にすぎぬ。兄は弟を介抱し、弟は兄に背くなよ。引くときは、兄弟いっしょに連れだつて引くのじゃぞ。馬に乗つて進撃するときも兄弟連れだつて駆けるのじゃ。兄が討たれたら、弟一人で帰ろうとは思ふな。弟が討たれたら、兄も帰つてくるな。血気盛んの若武者どもを戦に出すについては、老いた親も覚悟を決めているのじゃ。おまえたちもこの世に心を残すでないぞ。今日の門出を末期と思ひ極め、潔く討ち死にすれば、生きて親子の対面するより、どれほど嬉しいか。そこを、よくわきまえる

①とめることができないで。  
②かわいそうなこと。

③決してーない。

④しばらく。  
⑤人心地が無く。

⑥武蔵国の大郡。昔、武蔵野と呼ばれた原野。

⑦みじかい時間。かたとき。

⑧戦争に行くこと。

⑨源義経のこと。檢非違使の尉（＝判官）であつた。  
⑩お聞きになり。

⑪今後。

⑫念入り。  
⑬おっしやると。  
⑭つつしんで聞き。

る涙<sup>なみだ</sup>せきあえず、かくいう不便<sup>ふびん</sup>さゆえ、

「花<sup>はな</sup>のようなる若<sup>わか</sup>ものを、死<sup>し</sup>ねとはさらに思<sup>おも</sup>わぬ」

と、御前<sup>ごぜん</sup>をもうち忘れ<sup>わす</sup>れ、兄弟<sup>きょうだい</sup>にすがりつき、しばし消<sup>き</sup>え入り泣<sup>な</sup>きいたり。御大将<sup>おんたいしょう</sup>をはじめとし、あり合う諸<sup>あ</sup>武士<sup>しよぶし</sup>一同<sup>いちどう</sup>に、袖<sup>そで</sup>を絞<sup>しぼ</sup>らぬものはなし。

しかるところへ、入間郡<sup>いりまごおり</sup>の武者所<sup>むしやどころ</sup>、安西<sup>あんざい</sup>の弾正太郎氏<sup>だんじやうたろううじしげ</sup>繁<sup>しげ</sup>、あわただしく馳<sup>は</sup>せ参<sup>さん</sup>じ、

「さても平家<sup>へいけ</sup>の一門<sup>いちもん</sup>、君<sup>きみ</sup>ご発向<sup>はつこう</sup>のよし伝<sup>つた</sup>え聞き、四国<sup>しこく</sup>八島<sup>やしま</sup>に立<sup>た</sup>てこもり、いくさの用意<sup>ようい</sup>真最中<sup>まさいちゆう</sup>とうけたまわり候<sup>さうろ</sup>う。片時<sup>へんじ</sup>も早<sup>はや</sup>くご出陣<sup>しゅつじん</sup>、しかるべく候<sup>さうろ</sup>う」

と、大息<sup>おおいき</sup>ついで申<sup>もう</sup>しける。判官<sup>はんがん</sup>、聞<sup>き</sup>こしめし、

「おお、もつともさぞあらん。さりながら、幾万騎<sup>いくまんぎ</sup>こもるとも、ものの数<sup>かず</sup>とは思<sup>おも</sup>わぬなり。いかに弾正<sup>だんじやう</sup>、これなるものは佐藤庄司<sup>さとうしやうじ</sup>が子息<sup>しそく</sup>、三郎兵衛<sup>さぶらうひやうゑ</sup>継信<sup>つぐのぶ</sup>、四郎兵衛<sup>しろうひやうゑ</sup>忠信<sup>ただのぶ</sup>という兄弟<sup>きょうだい</sup>なり。向後<sup>きやうご</sup>心を合<sup>あ</sup>わせ、このたびの合戦<sup>かっせん</sup>、いさぎよく励<sup>はげ</sup>むべし」

と、ねんごろにの給<sup>たま</sup>えば、弾正<sup>だんじやう</sup>うけたまわり、「さては聞きおよびし、ご兄弟<sup>きょうだい</sup>にてましますよな。まことにご

のじゃぞ」

と、言葉涼<sup>ことばすず</sup>しげには勇<sup>ゆう</sup>ましく言<sup>い</sup>います。とはいえ、年老<sup>ねんじやう</sup>いた父<sup>ちち</sup>のこと、親子<sup>おんこ</sup>の別<sup>わか</sup>れに、涙<sup>なみだ</sup>はとどまるところがありませぬ。

「だからといって、こんな花<sup>はな</sup>のような若<sup>わか</sup>者を、死<sup>し</sup>んでほしいなどはゆめゆめ思<sup>おも</sup>つてはおらぬ」

と、御主君<sup>ごぬしきみ</sup>の前<sup>まへ</sup>であることも忘れて、兄弟<sup>きょうだい</sup>にすがりつき、しばらくは泣<sup>な</sup>いているのでありました。

御大将<sup>おんたいしょう</sup>義経<sup>よしきよ</sup>をはじめとし、居合<sup>いあ</sup>させた武士<sup>ぶし</sup>はみなその様子<sup>ようす</sup>に涙<sup>なみだ</sup>を流<sup>なが</sup>さぬものはありませぬでした。

そこへ、入間郡<sup>いりまごおり</sup>の武者所<sup>むしやどころ</sup>をあずかる安西<sup>あんざい</sup>の弾正太郎氏<sup>だんじやうたろううじしげ</sup>繁<sup>しげ</sup>が慌<sup>あわ</sup>しく駆<sup>か</sup>け込<sup>こ</sup>んできて、「申し上げます。平家<sup>へいけ</sup>一門<sup>いちもん</sup>は、義経<sup>よしきよ</sup>公<sup>こう</sup>が軍勢<sup>ぐんせい</sup>を率<sup>りつ</sup>いて奥州<sup>おくしゆう</sup>を御発向<sup>ごはつこう</sup>と伝<sup>つた</sup>え聞いて、四国<sup>しこく</sup>八島<sup>やしま</sup>に立<sup>た</sup>てこもり、戦<sup>いくさ</sup>の用意<sup>ようい</sup>の真最中<sup>まさいちゆう</sup>のこととございます。一刻<sup>いこく</sup>も早く御出陣<sup>ごしゅつじん</sup>なさるべきかと存<sup>ぞん</sup>じます」

と、大息<sup>おおいき</sup>をついで申<sup>もう</sup>し上げました。判官<sup>はんがん</sup>は、これを聞いて、

「おお、もつともじゃ。しかし、平家<sup>へいけ</sup>方が幾万騎<sup>いくまんぎ</sup>で立<sup>た</sup>てこもうとも、物の数<sup>かず</sup>ではないわこれ、弾正<sup>だんじやう</sup>。ここにいる二人<sup>ふたり</sup>は佐藤庄司<sup>さとうしやうじ</sup>の子息<sup>しそく</sup>、三郎兵衛<sup>さぶらうひやうゑ</sup>継信<sup>つぐのぶ</sup>・四郎兵衛<sup>しろうひやうゑ</sup>忠信<sup>ただのぶ</sup>という兄弟<sup>きょうだい</sup>じゃ。これからは、心を合<sup>あ</sup>わせ、この度の合戦<sup>かっせん</sup>には、よくはげんでくれよ」

と、丁寧<sup>ていねい</sup>に頼<sup>たの</sup>みます。弾正<sup>だんじやう</sup>はこれを聞いて、「さてはうわさに聞く御兄弟<sup>ごきょうだい</sup>ですな。まことに立派<sup>りつぱ</sup>な器量<sup>きりやう</sup>の天晴<sup>あまはら</sup>れな侍<sup>さむらい</sup>ぶりでございます。戦<sup>いくさ</sup>

① みごとな。  
② 人数。

③ あなた。  
④ いくさの経験がない。

⑤ 十分に用心して。

⑥ 油断して失敗すること。

⑦ 意味を強めるための語。

⑧ そういうことがあれば。  
⑨ 人を人とも思わないようす。

⑩ (戦いの) 方法。やり方。

⑪ 戦いで先頭になつて敵中に攻めこむこと。また、その人。

⑫ 戦場で敵の首、または武器を奪うこと。

⑬ なまいきなようす。  
⑭ 機嫌。

⑮ 便利。

⑯ 指図。

器量と申す、あつぱれお侍候う。さればいくさは勢の多少によらず、ただ一心の励み第一とか申し候う。貴殿達はいまだ不いくさにて、このたびが初めならん。構えて構えて、不覚ばしとり給うな。さあれば、君までのご恥辱ぞ」と、人もなげにぞ申しける。兄弟むつとせき上げしが、おししずめ、

「いかにもいかにも。御仰せのごとくわれわれ兄弟は、ついにいくさとやらんはいかように働き候うもかつて存ぜず候う。しかしながら、貴殿の指図をもつて、随分励み申すべし。もしまた、いくさの次第により、先がけ・生け捕り・分捕り・高名はつかまつり勝にて候う間、必ずお氣にかけられな」と、おこがましくこそ申しける。弾正、気色を損じ、

「やあ、兄弟。昨日今日、侍に交わり、戦場にて高名せんとや。さても口は重宝なもの。言われたり言われたり。よしよし。いらざる先がけいたさんより、ただ、わが下知に任せられ、命大事にせられよかし。悪しき意見は申さぬ」と、あざ笑うてこそ申しける。

の勝敗は、軍勢の多少ではなく、一心に励むかどうかであると申します。そなたたちはまだ戦をしたことがなく、今回が初めての戦になるとのこと。決して不覚を取るではないぞ。そんなことがあると、御主君にまで恥をかかせることになるぞ」と、

人もなげに言いました。兄弟はむつとしました。が、押しとどめ、

「いかにもいかにも、おっしゃるとおり、我々兄弟は、戦に出て、どのように働かねばならぬものか全く存じません。しかしながら貴殿にお指図いただければ、力の限り励む所存でございます。が、戦の次第により、先駆け・生け捕り・分捕り・功名は先に挙げたものの手柄でござりましょうから、ご心配には及びませぬ。お氣遣いくださいますな」と、堂々と言いました。弾正は、機嫌を悪くして、

「やあ。兄弟よ。昨日今日、侍の仲間に入つたくせに、戦場にて手柄を挙げるとな。さてさて口は重宝なものよ。よくまあ、言つたものじゃ。よしよし。用もない先駆けをするよりは、わしの言うことを聞いて、命を大事にするがよい。悪いことは言わぬ」と、あざわらつて言いました。

①もちろん。  
②あなた。

③「候う」の略。

④談判。

⑤その場の遊び・冗談。

⑥とりはからい。  
⑦決してしてはいけない。

⑧うらみ。

⑨終り。  
⑩言葉には言いつくせないほどである。

兄弟今はたまりかね、

「おお、この上は何がさて、ご辺の下知に任すべし。ご出陣の門出なれば、兵法稽古つかまつり、ご伝授に預からん。いざ、まいりそう」

と太刀に手をかけ、つめかける。弾正も飛びしさり、刀を抜かんとしけるととき、志田、中へ割って入り、

「これこれ、この稽古、それがし貰い申さん。最前よりのつめ開き、皆、君を大切に思われるゆえにてあり。侍たるものは、さほどの心ならでは、戦場へは出でがたし。おお、頼もしし頼もしし」

と、わざと座興にとりなして、事ゆえなくしずめしは、まことに文武の侍なり。判官ご覧じ、

「志田が了簡一もつて至極せり。いかに双方のものども、構えて意趣を残すべからず。このたびの出陣は、義経が一生の晴れいくさぞ。随分励め、面面」

と、勇みに勇んでそれよりも、西国さして発向ある、門出めでたし、千秋楽。めでたかりとも、なかなか申すばかりはなかり

兄弟はいまはもう堪忍ならぬと、言いつのります。

「おお。それでは、おぬしの命に従うことに致しましょう。御出陣の門出でございますから、兵法の稽古の相手をして、一手、御伝授してくださいませぬか、いざ。かかってきてください」

と、太刀に手をかけていまにも切らんばかりの勢いです。弾正も飛び下がって、刀を抜こうとしたところへ、志田三郎が中に割って入り、

「これこれ。この稽古は、わしがあずかった。最前からの言い合いは、皆、主君を大切に思うがゆえのこと。侍たるもの、そのくらいでないで戦場へは出られぬものじゃ。おうおう。なんとも頼もしいことじゃ」

と、座興のように取りなして、大事にならぬまえに取り取るさまは、文武両道に秀でた侍なればこそです。判官はこのさまを御覧になり、

「志田のとりはからいは、一々まことにもつともである。双方とも、いまの争いに遺恨を残したりするでないぞ。この度の出陣は、義経一生の晴れ戦じゃ。随分励めよ、ものども」と、勇みに勇んで、それより、西国に向けて出陣です。

榮えある門出はまことにめでたくおさまり、そのすばらしさは言葉にあらわすことができないほどでありました。

けり。

## 門出八島 第二段

- ①(頼朝の)代りに官職をつとめること。
- ②神戸市須磨区の鉄樹(てつかい)鉢伏(はちぶせ)の両山が海岸に迫っている地域。寿永三年(一一八四)、源義経が平家の軍を攻めたことで有名な場所。源平が合戦したところとして有名な場所。「屋島」とも。
- ③香川県高松市にある島山。源平が合戦したと陣中に設けた武士の詰め所。
- ④前々からの恨み。遺恨。
- ⑤陣中に設けた武士の詰め所。
- ⑥身分の高い人。

⑦他をないがしろにするほどの重用ぶり。

⑧とても口惜しい。

⑨文句。

⑩「犬骨折って鷹の餌食になる」を踏まえた言葉。鷹狩りで犬が骨折って追いついた獲物を鷹に取られる意で、苦勞して得た手柄をほかの人に奪われることに言う。

⑪かわいそうなことだ。

⑫札(さね)を小桜もよりの染革のひもで編みつつつたよるい。  
⑬「藤縄目」は「伏縄目」で、白・浅葱・紺などの色を段として山道もよるを表わした染革のひもで札を編みつつつたよるい。  
⑭(よるいの札を)革紐で編みつつつらせ、よるいをつくらせ。

さるほどに、九郎判官義経、頼朝卿の代官をこうむり、一の谷を攻め破り、八島にご陣をめされける。奥州勢の彈正太郎氏繁は、佐藤兄弟に意趣ある仲。わが手のものを役所に集め、

「さてこのたび、源氏の勢、われらをはじめ、大名小名歴多きその上に、何を不足に、佐藤兄弟めし出され、ここには継信、かしこにては忠信と、人もなげなる待だて。大將も目が明かず、見聞くも無念千万なり。なにとぞひつけ恥辱をとらせ、小言吐かば打ち殺せ。きやつらを一騎当千とお頼みある上に、入らざる忠を励み、犬骨折って鷹にとられな。いくさせんよりは、佐藤兄弟討つてとれ」

と、浜辺をさしてくだりしは、法に背きし振舞いなり。

げに思いても、思うにあかぬ親子の仲。いたわしや、佐藤庄司、継信は小桜おどし、忠信は藤縄目の鎧、常常好みしとて、にわかにおどさせ、信夫の小太郎、同く小一郎兄弟にとり持たせ、

さて、九郎判官義経公は頼朝卿の代官に任ぜられて一の谷で平家を攻め破り、八島に陣を構えておりました。

奥州勢と共に加わった彈正太郎氏繁は、佐藤兄弟ともから仲が悪かったので、自分の家来を役所に集め、

「今回源氏の勢として集まった大名小名の数は多いのに、何のためにわざわざ佐藤兄弟を呼び出したのであろう。そのうえ、ここでも継信、あちらでも忠信と、他に人はいないかのような重用ぶり、どうやら大將殿も侍を見る目がないらしい。なんとも腹立たしい限りじゃ。なんとか恥をかかせ、文句を言ったら打ち殺せ。義経公はあの兄弟を一騎当千の武者と頼りにし、兄弟は兄弟ではりきって忠にはげんでおる。うっかりするとこちらの苦勞がむくわれず、手柄をあちらに持つていかれそうじゃ。そうならぬよう、いくさをするより、佐藤兄弟を討つ方が大事じゃ」と命じて、浜辺をさしてくだって行ったのは、まことに武士としての道にはずれた振舞いでありませう。

親子の仲というものは、心配してももきりのないものです。父の佐藤庄司は、継信が小桜おどし、忠信は藤縄目の鎧を常常好ん

①手ににぎり持つ弓。一説に、にぎりの大きな弓。「たつ(＝発つ)」とかける。

②仮の囲いを作るために使う。  
③無秩序に打ち込んだ杭。縄を張って、敵や敵の馬の浸入を防ぐ。

④塩を焼く小屋。

⑤二里(一里は約四キロメートル)四方。

⑥敵の浸入を防ぐために、いばらの枝を束ねて作った柵。

⑦手がかり

⑧「波」に「無み(ないのこ)」をかける。

⑨きこりや登山者が持つ鉈(なた)に似た刃物。

⑩乳(縁の小さな輪)や緒を布でこしらえたわらじ。武者が戦場ではいたもの。

二人が方へ送らるる、親の心ぞあわれなる。

霞とともに手束弓、八島の磯に着きけるが、陣所陣所を見渡

せば、竹束・乱ぐい、たき捨てし所所のかがり火も夜は燃え、

昼は消えつつうす煙、塩屋の煙、立ちつづき、方二三里がその

間、逆茂木きびしくひきたれば、

「佐藤殿のご陣所はいづく」

と問わん便りさえ、波うちぎわに来る人を、海士かと思ればさ

もなく、十六七の小童の、腰に差いたる山刀、さすが品よく

大人びて、姉と思しき振袖に、持つも似合わぬ商いや。草鞋売

りには惜しかりし。信夫兄弟、

「これ子供、草鞋買わん」

と言え、

「いや、是は武者草鞋。旅人のご用にはたたず」

と言う。

「ふふ。陣所に商いするからは、あれに見えたる陣屋陣屋は、

誰誰と知りつらん。あらまし語って聞かせよかし」

「やすき間の御ことなり。毎日商いいたすゆえ、ご陣所役所は

でいたからと、急遽それぞれの好みの鎧を用意させ、信夫の小太郎・小二郎兄弟に届けさせました。まことに親の心というものはありがたいものです。

日を経て、二人は八島の磯に着きました。源氏の陣所を見渡すと、竹束・乱ぐいが立ち並び、あちこちで燃え残りのかがり火が煙を放ち、塩焼きの煙も見えます。二三里四方を逆茂木できつちりとかこつてあって、

「佐藤殿の御陣所はどこか」

と尋ねようにも人もいません。とそこへ波うちぎわ沿いにやってきた人がいます。海士かと思いましたがそうではなくて十六七の草鞋売りの童です。とはいえ腰に差した山刀は品よく大人びていて、いつしよにいる姉と思われる人は振袖を着ていて、草鞋売りにしておくには惜しい風情です。信夫兄弟が、

「これ子供、草鞋をくれい」

と言いますと、

「いえ、これは武者草鞋ですから、旅の方のお役には立ちません」

と答えました。

「ほほう。ところで陣所で商いをしているなら、むこうに見える陣屋のどれが誰の陣屋かということは知っておろう。あらましを聞かせてくれぬか」

「たやすいことでございます。毎日商いしておりますから、ご陣所や役所のことにはよく存じております。

①「峰（お）の上」の意。山の峰つづきの高所。まっしろ。

②「水のない堀」は四方を展望するための構築物。

③「槽」は四方を展望するための構築物。

④「水のない堀」は四方を展望するための構築物。

⑤「旗印の名」笹の葉を抱き合わせた意匠。以下、旗印をならべる。それぞれ、亀井・片岡・伊勢・駿河氏の旗印。

⑥「旗印の名」稲の穂を抱き合わせた意匠。これに花を入れたものを図案化したもの。

⑦「旗印の名」「うづつば」は矢を入れる籠。これに花を入れたものを図案化したもの。

⑧「旗印の名」「独鈷」は密教で用いる、両端がとがった金属製の短い棒。もとは武器。「輪宝」はもとがインドの車輪状の武器。仏教で理想の国王転輪聖王（じょうおう）の七宝のひとつ。この二つを図案化したもの。

⑨「巴」は柄（弓を射るときに左手首につける具）の断面（おたまじやくし状）を図案化した旗印。以下、数をならべる。

⑩「旗印の名」輪を重ねて図案化したもの。

⑪「旗印の名」空を飛ぶ雁を図案化したもの。

⑫「旗印の名」具足・刀・太刀・弓・矢などの七つの道具。流派で違う。

⑬「旗印の名」流派で違う。

⑭「旗印の名」流派で違う。

⑮「旗印の名」流派で違う。

⑯「旗印の名」流派で違う。

⑰「旗印の名」流派で違う。

存じたり。教え申さん、聞き給え」

と、東西南北指さして、ねんごろにこそ語りけれ。

### 役所づくし

「あれあれ東の尾上より、南の岡の小松原、雪の山かとひた白の、幕をそのまま麓川、空掘ほって高槽、風に渦巻く白旗の、かげに軍兵兜をならべ、鎧の袖をつらねしは、御大将のご本陣。その旗本にうち続き、抱き笹・抱き稲・花うづつば、波に兎の印こそ、亀井・片岡・伊勢・駿河。独鈷に輪宝つけたるは、常陸坊海尊、兼房は右巴・一つ巴・三つ巴。五つ輪違い・六つ雁金、七つ道具を立てたるは、大将の膝元さらず、武蔵坊弁慶の役所」とこそは教えけれ。

「前は逆茂木ぎぎとして、井楼高く揚げさせ、用心厳しき勢いは、先手の大将、佐佐木殿。さて竹垣に折り木戸打ち、印ばかりを立てたるは、旗本のほろ大将、熊谷殿の陣所なり。川越が物見の小屋、松にかけたる太鼓・鐘、明け行く床を驚かす、雪

お教えしますから、よくお聞きください」と、東西南北を指さしながら、丁寧にご案内してくれるのでした。

### 役所づくし

「あの東の尾上から南の岡の小松原、雪の山のようにまっしろの幕を麓川までかけてあり、空掘り掘って高槽を作り、風に渦巻く白旗のかげに軍兵の兜を並べ、鎧の袖をつらねているのは、御大将義経殿のご本陣でございます。その旗本に続いて、抱き笹・抱き稲・花うづつば、波に兎の紋所をつけているのは、亀井・片岡・伊勢・駿河。独鈷に輪宝の紋所をつけているのは、常陸坊海尊。兼房の紋は右巴、一つ巴・三つ巴。五つ輪違い・六つ雁金。七つ道具を立ててあるのは、義経公のおそば近くに仕える武蔵坊弁慶の陣です」と教えられました。

「前に逆茂木を高く立て、井楼を高くあげて厳しく用心しているのは先手の大将佐々木殿。竹垣に折り木戸をつけ、印だけ立てているのは、旗本のほろ大将、熊谷殿の陣所です。川向こうに物見の小屋があり、松の木に太鼓・鐘をかけて明け方に打ち鳴らす用意をしてある、雪に朝日の紋所は軍大将の畠山殿、手勢は五千余騎と聞いています。さて一重菱・入れ子菱・花菱・松皮・三がい菱の紋所は小笠原党の軍勢です。二つびきの大幕は平山殿の

- ① 旗印の名。菱を圖案化したもの。
- ② 旗印の名。二本線を圖案化したもの。
- ③ 旗印の名。「おもたか」は植物。その葉と花を圖案化したもの。
- ④ 旗印の名。波の立つ様子を圖案化したもの。
- ⑤ 旗印の名。開いた扇を圖案化したもの。
- ⑥ 楯を並べて垣のようにしたもの。また、そのための楯。
- ⑦ 手に持つ楯。
- ⑧ 左を上右を下にして重ねること。
- ⑨ 徒歩の兵。歩兵。
- ⑩ すばらしい。
- ⑪ 三月。
- ⑫ 旗印の名。
- ⑬ 旗印の名。「目結」は回りの字形の模様。これがたくさんある意匠か。
- ⑭ 旗印の名。亀の甲の形を圖案化したもの。
- ⑮ 旗印の名。
- ⑯ 旗印の名。三角形を三つ組み合わせたもの。
- ⑰ 旗印の名。藤の花房を上向きに圖案化したもの。
- ⑱ 旗印の名。藤の花房を下向きに圖案化したもの。
- ⑲ 旗印の名。揚げ羽蝶を圖案化したもの。
- ⑳ 敵の正面に向かう軍勢。
- ㉑ 敵の側面または背後から攻める軍勢。
- ㉒ 旗印の名。
- ㉓ 並ぶものがない。
- ㉔ 「白妙」は白意。源氏の旗は白いことから、源氏の旗が多くなびていることをあらわす。

に朝日の印こそ、いくさ大将畠山。手勢は五千余騎とかや。さ  
 て一重菱・入れ子菱・花菱・松皮・三がい菱、小笠原の一派な  
 り。二つびきの大幕は、平山の陣所、おもだかは小山の一派、  
 立つ波は小栗党、北条はあと備え、右陣・左陣は土肥・三浦。  
 開き扇の旗をなびかせ、騎馬の武者二三十。「ご用心」と呼ば  
 わって、役所役所をかけ通るは、佐竹のなにがし小屋巡り。浜  
 の手は鎌倉勢。さて山の手は都勢。垣楯持ち楯雌鳥羽につき  
 ならば、かち武者・騎馬武者弓弦をしめし、すわといわん声の  
 内、かけ出でん気色にて、君を守護し給いける、まことにゆゆ  
 しゅうそうらいし。ころは弥生の空ながら、秋にさえたる月に  
 星。千葉の介の役所なり。滋目結は結城の七郎、亀甲は佐原の  
 十郎、三本うちわ・鱗形、風にもまれて上り藤、またさがり  
 藤、揚げ羽の蝶、武蔵勢・相模勢、三の備えと聞こえける。さ  
 て、奥方の軍兵は、十万余騎を二手に分け、陣所は大手・か  
 らめて、中に立てたる旗の紋、雪折れ竹にむら雀、出羽の庄司  
 が二人の子、佐藤継信・忠信は、日本無双のつわものと、敵も  
 見方も隠れなし。そのほか浦浦山山も、皆白妙に白鷺の、群い

陣所、おもだか紋は小山一族、立つ波紋は小栗党、北条勢はあと備えです。右陣・左陣は土肥殿と三浦殿。騎馬の武者二、三十騎が開き扇の旗をなびかせつつ『ご用心』と叫んで役所役所を駆け通っているのは、佐竹殿の武士が小屋巡りをしているところですよ。浜の方は鎌倉勢で、山の手は都勢です。垣楯や持楯を雌鳥羽のように重ね、歩兵・騎馬武者が弓矢の用意をし、「それ」と声がかかればすぐにかけて出る用意をして、御主君を守っています。まことに頼りがいのあることとごさいます。いまは春三月でありますが、秋の空にさえたる月に星の紋所は千葉の介の役所です。滋目結紋は結城の七郎、亀甲紋は佐原の十郎、三本うちわ・鱗形、風にもまれる上り藤やさがり藤、揚げ羽の蝶の紋所は武蔵勢・相模勢で、三番手の備えだそうす。さて、奥州から駆けつけてきた軍兵は、十万余騎を二手に分け、陣所は大手とからめての双方、中に立てた旗の紋が雪折れ竹とむら雀なのは、出羽の庄司の二人の子、佐藤継信・忠信兄弟です。この国に並ぶものないつわものと、敵味方にも有名な方々です。そのほか海にも山にも、みな白鷺が群れている松のように、源氏の白旗をなびかしている勢いはかぎりがないほどです」

①代々の家来。

②どうせのことなら。

る松見れば、源氏の旗をなびかする、多勢は限り知られずと、残らず教え語りける。

信夫兄弟手を打って、

「さてよく覚えたり。われわれは佐藤殿の家人。父御の方より御兄弟へ、この鎧をまいらせらる。とてもこのことに案内してくれぬか」

と言え、娘よろこぶ色見えて、

「ご案内もいたすべし。さて、なれなれしゆうそうらえども、われわれはこのあたりの狩人、鷲尾と申すものの子供なるが、源平の兵乱にて狩りもかなわず、親を養う営みに、習わぬ草鞋売り候。あわれ殿様へ、ご奉公せさせてたべ」

と、言いもあえぬに信夫兄弟、

「これは幸い。戦場には一人も便りぞや。吉相吉相。われわれに任せよ。よき奉公に肝いらん」と、連れて陣所に急ぎけり。

明くれば三月十八日。大將軍の御いでたち、赤地の錦のひたたれ、紫すそごの御着背長、あぶみふんばり鞍かさにつつ立

④心をこめて世話を焼く。  
⑤武家の上着の一種。よろいの下に着用した。えりは今の着物に似ており、おくみがなく、胸ひもが着いている。腋がいており、袖の付け根に菊綴じが付けれ、袖のとれるのを防ぐ。袖は巾広く、袖しぼりのひもがある。もとは労働用。  
⑥上は白ですそにいくにしたがって紫が濃くなる染め方。  
⑦大將の着用する鎧が大形なのをいう美称。  
⑧馬の鞍から両側に下げ、馬に乗ったときに足を踏みかける道具。  
⑨馬の鞍のまたがるところ。

と残らず教えました。

信夫兄弟は手を打って喜び、

「よく覚えていたものだ。我々は佐藤殿に仕えているもの、お父上よりご兄弟へ、この鎧を贈りたいのだが、二人のいるところまで案内してくれぬか」と頼みますと、娘はよろこんで、

「ご案内いたしました。なれなれしく思われるかもしれませんが、私はこのあたりの狩人で鷲尾と申すものの子供です。源平の軍のため狩りもできず、親を養うためにこうして慣れない草鞋売りをしております。どうか、お殿様にご奉公をさせてください」

と、言いも終わらないうちに、信夫兄弟は、「これは幸いなこと。戦場では一人でも多いほうが頼りになるもの。よしよし、われわれに任せるがよい。よい奉公ができるよう世話してやるぞ」

と、兄弟を連れて陣所に急ぎました。

次の日は三月十八日、総大將の出で立ち、赤地の錦の直垂に紫すそごを着背長に着て、鎧をふんばり鞍のうえに立ち上がり、

①当時、京都の犯罪をとりしめし、京都の治安を守った官職。今の警察と裁判所の役割を果たした。  
②位の一。判官。

③「綿上」は「肩上・綿纏」とも。鎧の胴をつるために両肩にあてる細い部分。これを肩から浮かせ、きちんとあてずにいるようすを言う。

④降参した人。

ち上がり、

「一院の御使、檢非違使五位の尉、源の義経」

と高らかに名乗って、よせ来る平家の兵船を、今や今やと待ち給う。佐藤兵衛繼信は、父が送りし小桜おどし、綿上高に着流し、今朝まで着せし鎧をば、鷲尾にうち着せて、馬を乗り捨て、御馬の前にかしこまる。大将、ご覧じ、

「彼はいかに降人か」

「いや、これは繼信が弟にて候う。御馬の先にて討死にせさせ申さんため、めし連れ候う」

と申せば、判官重ねて、

「繼信が弟は忠信ばかりと覚えしに、心得がたし」

との給えば、繼信謹んで、

「さん候う。彼はこの辺の狩人、鷲尾三郎と申すもの。人と生

まれし思い出に、侍に交わりたきよし、彼が姉たつて嘆き候

うゆえ、色知らぬ東夷の繼信め、志にほだされ、兄弟の約だ

くつかまつつて候う。あわれ御馬の口にめしつけられそうらわ

ば、ありがたくそうらわん」

⑥スマートでない関東の田舎侍。「東夷」は京都の人が関東の無骨な武士をあざけて呼んだ語。ここでは自嘲的に用いている。  
⑦人情にひかれて。  
⑧約束し、承諾すること。  
⑨馬の口取り。馬の口を取って馬を引き動かす人。

「院の御使、檢非違使五位の尉、源の義経」と高らかに名乗って、よせ来る平家の船を、今や遅しと待っています。佐藤兵衛繼信は、父から届けられた小桜おどしを綿上高に着流し、今朝まで着ていた鎧を、鷲尾に着せて、馬を乗り捨て、義経の馬の前にかしこまりました。大将はご覧になって、

「このものは、だれだ。捕まえたのか」

「いや、繼信の弟でございます。大将殿の馬先で討死させようと連れてきました」

と申しあげました。義経が、  
「繼信の弟は忠信だと思っていたが……」

と言いましたので、繼信はつつしんで、

「さようでございます。彼はこのあたりの狩人で、鷲尾三郎というものです。が、人と生

まれた思い出に、侍となって人交わりがしたいとこのものの姉が嘆きますゆえ、人情を知らぬ東えびすの繼信ではございますが、その

志にほだされ、兄弟の約束をいたしました。なんとか、馬の口取りにでも使っていただけ

ればありがたく思います」

⑤そのとおりです。

①心の奥底から。  
②喜び、満足する。

③すぐれた能力があること。  
④しあわせもの。  
⑤同じように(しあわせに) になりたい。  
⑥武士。  
⑦いつそのこと。

⑧本陣のうしろにひかえた陣。

⑨男の子をさげすんで呼ぶ語。こぞう。

⑩今後。  
⑪よく買う人。

⑫注文して。

⑬にくらしく。

⑭納得。  
⑮ぞっとして。

と申し上げれば、義経ほとんど悦喜あり。

「あつぱれ器量の若もの。継信は果報もの。あやかりたし。いかにもそれがしめし使い、弓とりとなすべきが、とてもものことについてなれば、姉はどふぞなるまいか」

と、たわぶれ給えば、鷲尾は鎧の袖を顔にあて、恥ずかしそうなる武者振りに、敵も太刀をば捨てぬべし。安西の弾正太郎、後陣よりつつと出で、

「継信殿のご舎弟、お近づきになり申さん。やあ、これはこのごろ陣屋にて、草鞋売つたるわつぱなるが、これが貴殿のご舎弟か。はて、よい弟を持たれたり。向後われらも得意になり、草鞋あつらえ申すべし。軍中にもちゆるからは、百里も二百里も歩まるるよき草鞋が求めたし。値にはかまわず、朋輩の仲間れば、五錢三錢は、ただもとらせてやろうわ」

と、さもにくていにぞ申しける。継信はむつとせきあげしが、「おお、易いこと易いこと。さりながら、百里、二百里はく草鞋を何の用に入り申す。ふふ、合点たり合点たり。臆病風に寒気立ち、大敵に追つ立てられ、本国へ一飛びに逃げ行くための草鞋

と申し上げました。義経はとても喜び、「あつぱれな若者じゃ。継信は果報ものじゃな。あやかりたい。では、わしが召し使つて、弓取りにしてやろう。ところで、ついでに、その姉の方もどうにかならないものかな」と冗談を言いますと、鷲尾は鎧の袖に顔をあてて、恥ずかしそうにしています。その様子には敵も太刀を捨てることでしょう。そこへ、安西の弾正太郎が、後陣より前へ出てきて、

「継信殿の弟君ならせひお近づきになりたいのですが、あれあれ、見れば、このごろ陣屋で草鞋を売っている子供ではないか。これが貴殿の弟？ はて、よい弟を持たれものじゃ。ではこれからは我々もお得意様になつて、草鞋をあつらえるといたそう。戦で使うのだから、百里も二百里も歩けるようなよい草鞋がほしい。値段はいくら高くてもよい。仲間のことだから五錢や三錢はただでもとらせてやろう」

と、いかにも憎々しげに言いました。継信はむつとしましたが、

「おお、そんなことはお安いこと。とはいえ、百里・二百里も履ける草鞋がどういうわけに入り用なのかな。おお、わかった。臆病風に吹かれたり、強い敵に追いかけられたときに、田舎へひと飛びに逃げて行くためじゃな。おお、それならわけもないこと」

か。おお、安いこと」

と言えば、弾正重ねて、

「これさ、何にもせよ、わが脛は、人に變つてたくましし。これに合わせて作ってくれ」

と、土足を継信が膝元に踏み出す。継信、太刀に手をかけ、

- ① はばの広いすね。
- ② インドのこと。
- ③ 手首・足首の骨のこと。

「ほほ、見事なだんびらすね。この足にて逃げたらば、天竺までも一飛ならん。養老骨、切りとって、形に合わせて作らん」

と、太刀を抜けば、弾正も飛びしきつてずばと抜く。土肥、佐佐木、畠山、弁慶など左右にすぎり、

「これは不吉」

としずむれども、

「放せ放せ」

とねじ合うところに、平家の兵船漕ぎ連れて、ときの声をぞあげにける。そのひまに、同士いくさもようよう治めしずまりぬ。

三人乗ったる小船、磯近く漕ぎよせ、大将船ばりに立ち上がり、

「一品式部卿、葛原の親王、九代の後胤、能登の守教経。源氏の大將義経に、見参の印に、小兵ながら中差しをまいらせん。」

- ⑦ 和船で、両船縁の間に何本も渡した横木。船を水圧から守るためのもの。
- ⑧ 令で、親王・内親王の位。
- ⑨ 儀式などをつかさどる式部省の長官。
- ⑩ 桓武天皇の第三皇子。桓武平氏の祖。
- ⑪ 子孫。
- ⑫ 矢の一種。鎗矢以外の実戦用の矢。

と言いますと、弾正はさらに、

「いずれにしても私のすねは人一倍たくましいぞ。これに合わせて作ってくれよ」

と、土足のまま継信の膝元に踏み出しました。継信は太刀に手をかけ、

「ほほう、見事なだんびらすねじや。この足で逃げたならば、天竺までもひと飛びに行けよう。養老骨を切りとって形に合わせて作ろう」

と、太刀を抜きますと、弾正も飛び去つてすばと太刀を抜きました。土肥、佐々木、畠山、弁慶などが仲裁に入つて、

「内輪もめは不吉だから」

と止めますが、

「放せ放せ」

とねじ合っていました。と、そこへ、平家の兵船が漕ぎよつてきてときの声をあげましたので、その間に内輪もめもおさまりました。平家の兵船から三人が乗った小船が磯近くまで漕ぎよせて、船のへりに立つて、

「一品式部卿葛原親王九代の後胤能登守教経が源氏の大將義経に見参の印に、中差しを射かけてごらんに入れる。受けてくださいれ」

① 大声。

② 大げさである。  
③ 弓を射る力の強さ。

④ 望みである。「ぞう」は「ぞうろう」のなまつた語。

⑤ どうなるかを緊張して見守るようす。「かたず」はそのときに口の中にとまるつば。

⑥ 人々を両脇に分けるようにして馬を乗り入れて。  
⑦ 敵の矢が飛んでくる正面。

⑧ 露のようにほかない命。  
⑨ さしあげて。  
⑩ 死骸。

⑪ 普通のものより長大な矢。

⑫ 閻魔が人間の生前の善悪を書き留めているという帳面。「訴えん」はそれに記録してもらうよう頼むこと。

⑬ 矢を射るときにねらうところ。  
⑭ 原文「つるじり」。よろいの胴の正面の、染革でつつんだところ。

⑮ 人としてのなき。

⑯ しきりに。  
⑰ 四人で弓を曲げ、一人が弦をかけるほどの強い弓。

⑱ 「束」は長さを表わし、弓を握ったときの握り分。それが十五回分の長さの矢であることを表わす。  
⑳ 矢を弓の弦にかける。  
㉑ 正確に。

㉒ よろいの胴の最上部の化粧板のところ。  
㉓ 矢が矢羽根の付け根まで深く突き刺さって。

受けてご覧ぞうらえ」

と、大音上げてぞ申さるる。判官陣頭に駒かけすえ、

「おお、ものものし。能登殿のご弓勢、関東までも隠れなし。

ただ中に受けとめて、九郎が鎧の札試しとう存ずるなり。ここ

のほどが所望ぞう」

と、胸をたたいての給えば、すわや源平両大将、安否はここ

ぞと敵味方、かたずをのんで見るところに、小桜おどしに鹿毛

の駒、味方の陣を一文字に乗り分けて、矢面にかけてふさがり、

「そもそも、これは出羽の庄司が総領、佐藤三郎兵衛継信とは

わがことなり。本国を出でしより、露命は君にたてまつり、か

ばねは八島の魚口に与う。能登殿の大矢を、それがし試みつか

まつり、閻魔の帳の巻頭に訴えん。矢壺は君と同前」

と、弦ばしりを三度なで、につこと笑うて待ちかけしは、目を

驚かすありさまなり。教経は仁ある大将。感じてさすが放ち得

ず、菊王しきってすすむれば、また、げにもと思われけん。

五人張りに十五束、からりとつがい、引きしほり、しばし固

めて、えいやつと切つて放せば、あやまたず継信が胸板に、羽

と、大声で言いました。判官は陣頭に馬を走らせ、

「おお、ものものしいこと。能登殿の弓の腕前は関東までもよく知られております。胸の真ん真ん中で受けとめて、私の鎧の強さがいかに試したいと思えます。このあたりをねらって下され」

と、胸をたたいて言いました。すわ、源平の両大将がここで雌雄を決するのかと、敵味方双方ともかたずをのんで見ていました。とそこへ小桜おどしに鹿毛の馬に乗り、味方の陣から一直線に飛び出して矢面をふさいだものがいます。

「私は出羽庄司の総領佐藤三郎兵衛継信でござる。国を出て以来、命は君に差し出したと覚悟し、しかばねは八島の魚に与えてもらうつもりでおります。能登殿の矢をまず私が受け止めて死ぬ覚悟、私に射かけていただきました」と、よろいの弦ばしりを三度なでにつこりと笑って待っているさまは、まことに人の目を驚かすようでありました。

教経は情け深い大将ですので、その覚悟に感心してなかなか弓を射ることができませんでしたが、おつきの童の菊王がしきりにすすめますので、思い直し、五人張りの弓に十五束の矢をつがえ、引きしほりしばらくねらいを定めてからえいやつと放ちますと、継信の胸板にみごとに命中し、血煙りがばつとたちました。

① 報復の矢。

② ひだり手。弓を持つ手であることによる。  
③ みぎ手。馬の手綱を持つ手であることによる。

④ いたわしいようす。  
⑤ なりゆき。

⑥ よろいの胴尻にまとう帯。

⑦ してしまった。

⑧ 陸地。  
⑨ 供養。

⑩ もみにもんで。お互いに激しく攻め合う。

⑪ 死者の冥福のために仏事を行なうこと。ここ  
では弁慶が敵の首を数珠のようにすることに  
ついて言う。  
⑫ 敵の首を運んで数珠のようにすること。  
⑬ (首を) 寄進してください。

ぶくらせめて、はっしとあたり、血煙がばつとたつ。継信弓矢  
うちつがい、答の矢を放さん引かんと、二三度、四五度しけれ  
ども、魂くらみ息もきれ、左手のあぶみ蹴放つて、右手へか  
つばと落ちけるは、無残なりける次第なり。菊王は首とらんと、  
おり立つところに、忠信はるかに放つ矢が、左の膝にずばと  
立ち、どうと伏すを、能登の守、舟より飛び降り、菊王が上帯  
つかんで、船底へ投げ入れ給えば、大力にうちつけられ、みじ  
んに碎けて死してんげり。これを見て、平家の軍兵、舟を乗り  
捨て、われ先にと陸へさつとうち上がる。兄継信が孝養と、忠信  
まつ先かけければ、鷺尾三郎・信夫兄弟、彼らに続いて、源氏  
のつわものかけちがえ、入れちがえ、もみにもうてぞ戦いけ  
る。いくさなかばに武蔵坊弁慶は、首二三十、数珠つなぎに  
して、ひきずり来たり。

「討たれしものの追善に、首数珠を思い立ち、今少し足らざれ  
ば、奉加に入ってたまわれ」

と、長刀とりのべ、切つてかかれば、よせ手はさつとひきたり  
ける。

継信は弓に矢をつがえ、答の矢を放とうと  
二三度、四五度試みましたがもはや息がきれ  
てしまい、左手のあぶみを蹴つて右手の方に  
落ちてしまいました。まことに無残なありさ  
までした。菊王はその首をとろうと舟からお  
り立ったところに、忠信がはるか彼方から放  
つた矢が左の膝にずばとささり、どうと伏し  
てしまいました。それを見て能登守は舟より  
飛び降り、菊王の上帯をつかんで、船底へ投  
げ入れましたが、大力にうちつけられました  
ので、碎けて死んでしまいました。

これを見て、平家の軍兵たちは、舟を乗り  
捨て、われ先にと陸へ上がっていききました。  
忠信は兄継信の供養のためとまつ先かけこ  
んで行きます。鷺尾三郎・信夫兄弟、さらに  
は源氏のつわものたちが入り乱れてはげしい  
戦いになりました。

その戦の最中、武蔵坊弁慶は、首を二三十、  
数珠つなぎいで、ひきずって来ました。  
「討たれたものたちを弔うために首数珠を思  
い立ったが、数珠にするにはまだ少し足りな  
いぞ。数珠のために首をくれい」  
と叫びながら長刀を振り回して切つてかかり  
ますと、攻めてきた敵はさつとひきあげてい  
きました。

① けちである。  
② 死後の世界。

③ 首を、筒を引き抜くように抜くこと。

④ 香川県にある地名。屋島合戦のとき義経の軍はこの地で擾乱戦術をとったという。

⑤ 追い立てられて。

⑥ すべての煩惱。「煩惱」は、欲・怒りなど人間の心身を悩ませるもの。百八あるという。

⑦ もとバラモン経の神。仏教では仏法を守る神の一とされ、捷疾鬼に仏舍利が奪われたとき走って追いかけて取り返したという。このことにより、足の速い神とされる。  
⑧ 原文「はくもん天」。仏教の守護神として帝釈天(たいしやくてん)とともに、仏の右側に侍している。  
⑨ 中国の魔よけの神。  
⑩ 獅子の美称。

「ええ、しわい<sup>①</sup>こと。後生<sup>②</sup>に何が惜しいぞ」

と、逃げる敵を追いまわし、ねじ首・打ち首・胴ちぎり・筒抜き、牟礼高松を縦横に、追っ返し、追いもどし、打ち立て立ち立て斬りまわるは、すさまじかりし勢いなり。波に漂い失せしもあり、人馬にせかれて死するもあり。かなわじと、平家の勢、飛び乗り飛び乗り舟は沖、陸は陣所へさつとひく。弁慶は立ち帰り、討ちとる首をつなぎそえつなぎそえ、

「おお、これでこそ数珠一連、百八煩惱作らんより後生が大事。南無阿弥陀。南無阿弥陀仏」

と念仏し、本陣さして帰りける。

「あつぱれ違駄天・婆羅門天、鍾馗大臣、獅子王の、荒れたる姿もかくやらん」

と皆感ぜぬものこそなかりけれ。

「ええい、命を惜しんでなんになる」

と、逃げる敵を追いまわし、ねじ首・打ち首・胴ちぎり・筒抜きにし、縦横無尽の活躍ぶりです。敵を、追いかけて引きもどし、打ち立て打ち立て斬りまわるさまはまことにすさまじいもので、波に漂ったまま死ぬものもあれば、人や馬の下敷になって死ぬものもいました。これはかなわぬと平家の軍勢は舟に飛び乗ったり、陸の自分たちの陣所へさつと引いていきました。弁慶はもどりながら、討ちとった首をつないで、

「おお、これで数珠首一連、百八になった。

この世で煩惱の罪をおかすより、死後の成仏が大切。南無阿弥陀。南無阿弥陀仏」

と念仏しながら、本陣をさして帰っていきました。韋駄天・婆羅門天・鍾馗大臣・獅子王のあばれる姿を髣髴とさせる荒々しさだと感心せぬものはないほどでした。

## 門出八島 第三段

①海の瀬戸を渡る。  
②水をかいて船を進めるための道具。

③戦いで、矢を射合うときに出す叫び声。  
④境遇。

⑤つぎつぎに散る。

⑥ひどくさびしい。  
⑦海辺で、曲って入り込んだところ。

⑧いただく。  
⑨つれて。

⑩塩を焼くための小屋。  
⑪湿気のために海上が曇ること。

⑫心の内の意の「うら」をかける。あたり一面、  
⑬なんともなくさびしい。  
⑭心は秋の夕べのようにさびしいとき。  
⑮「洲崎」は香川県の地名。  
⑯地名。前出。

かくてそののち、夕霞八島の浦の松暗く、群れいる鷗立ち騒ぎ、戸渡る舟のかじの音、しんしんとしてもものさびし。ときの声、矢叫びも磯うつ波にひきかえて、移り変れる境界は、明日の身の上思わせし、あわれ催す沖つ風。磯山桜かつ散るも、心を砕く種となり、いとものすごき浦曲かな。継信が忠勤、義経感じ思しめし、

「今一度対面せばや。たずね来たれ」

と忠信仰せをこうぶりて、信夫兄弟左右に具し、泣く泣くご陣を出でけるが、

「いざ、立ち別れ、たずねん」

と、塩屋の辻より主従三方へこそは別れけれ。まだ宵闇の潮ぐもり、浦さび渡る春の夜は、心ぞ秋の夕なるに、洲崎の堂の西東、牟礼高松の北南、

「奥州の佐藤殿やおわするか。継信殿やおわするかや。君より

その日の戦いも終わって夕霞のころ、八島の浦の松のあたりは暗く、鷗の群れが立ち騒いでいます。浦を渡る舟の舵の音もしんしんとして、まことにものさびしい有様です。ときの声をあげ、矢を射る叫び声が聞こえていた磯も、いまは引いては返す波の音が聞こえるだけです。一日のうちにこうしてはげしく移り変っていくあたりの光景は明日のわが身のことを考えさせられます。あわれをさそう沖の風や磯の山桜が散る様子も悲しみを誘うだけの、さびしい浦のありさまです。

継信の忠誠に義経は感動し、

「もう一度対面したい。どうなったか見てまいれ」

と忠信に命じました。忠信は信夫兄弟といっしよに泣きながら陣を出ていきましたが、

「さあ、ここからは別々にさがしに行こう」と、塩屋の辻より主従は三方に別れていきました。

まだ宵闇で曇り空です。浦のさびしい様子は、春の夜とはいえ秋の夕べのような気持ちにさせられます。洲崎の堂の西や東、あるいは牟礼高松の北や南を、

「奥州の佐藤殿はいらっしゃらぬか。継信殿はおりませぬか。ご主君がお呼びでござる。弟の忠信が迎えに来ました。」

① 貴人の命令。

の御錠にて、弟の忠信がお迎いに来たりし」と、静かに呼んで通れども、答ふるものこそなかりけれ。今朝は兄弟連れたりしに、今宵はじめて一人行く、八島の波の音までも、昨日に変わる心して、

「のう継信殿、兄上」

- ② 苦で屋根を葺いたそまつな小屋「苦」は昔や茅を編んだもの。  
③ 手傷をおっていること。  
④ つがいの千鳥の一羽。  
⑤ 「つき弓」は槻木（つきのき）で作った丸木の弓。「つきる（＝なくなる）」をかける。

と、呼ばんとすれど声立たず、峰にひびくは松の風。苦屋の方にかすかなる、手負の声の聞こゆるを、嬉しやそれかと走りよれば、群れて友呼ぶつま千鳥、ばつと立っては乱れ行く。うしろの山に声するは、信夫が呼ばうこだまにて、継信とも佐藤とも、答うるものはなかりけり。今は力もつき弓の、いるかいなさにかけめぐり、

「のう兄上はおわせぬか。継信殿やおわするか」

と、声をばかりに呼び立て呼び立て、また伏し沈み嘆きけり。

- ⑥ 哀れなことだなあ。  
⑦ すぐれた兵士。能登守教経のこと。  
⑧ 体で、そこを痛めつけられると命にかかわる大事な部分。  
⑨ こわれて役に立たない舟。  
⑩ ちよつと身をかくすほどの物陰。

むざんやな、継信は、精兵に急所を射られ、大事の痛手といながら死にもやらず、片割舟の片陰に漂ひ伏していたりしが、

弟の声と聞くからに、ようようにはい出で、

「忠信か」

と、静かに呼びながらいきますが、答えるものはありませんでした。今朝は兄弟でいっしょに連れ立っていたのに、今宵は一人で兄を探しています。八島の波の音まで、昨日とはちがう音のように聞えます。

「のう継信殿、兄上」

と、呼ぼうとしますが、声が出ず、峰にひびくのは松風だけです。漁師の小屋のあたりにかすかに傷を負った人の声が聞えるので、

「嬉しや、兄か」

と走りよつてみると、群れて友を呼ぶ千鳥の声で、ばつと立って、乱れ飛んでいくだけです。うしろの山に声がすると思つて聞くと、信夫が呼んでいる声のこだまで、継信とも佐藤とも、返事してくれるものはありませんでした。今は力もつきで、あちこちかけめぐり、「のう、兄上はいないか。継信殿はおられぬか」と、声の限りに呼んでみますが、また伏して、嘆いています。

かわいそうに、継信は能登守教経に急所を射られ、大きな傷を受けましたが、死ぬこともできず、こわれた舟の陰にふらふらとやってきて、横になっていました。弟の声が聞こえてきたので、ようやくはい出し、

「忠信か」

と聞くも嬉しく走りより、

「いまだ存命しますか」

と、すがりついて抱き起し、額をおさえ、

「御傷はいかに」

と問いければ、今を限りの継信は、わが身のこととはさておいて、

「君はいかが渡らせたまふぞや。御身は傷をも負わざるか。味方

は何ほど討たれしぞ」

と、絶えゆく息の下にさへ、弓矢とる身の一言と伝え聞くだに

あわれなり。忠信涙をおさえ、

「君もわれらもつつがなく、いくさは味方の勝利なり。御供申

せとの仰せなり。具しまいらせん」

と言いければ、

「おお嬉しし。最期に君を拝し御前にて死すべきぞ。つれてま

いれ」

と言うところへ、信夫兄弟かけ来たり、とこうしつらい、洲崎

の堂の破れ戸に、継信を抱きのせ、さきを忠信あとは信夫がか

きそえて、涙にしおれ、たどたと行くや、東の山の端に、

という声を聞くやいなや、忠信はよろこんで走りより、

「まだ生きていましたか」

と、すがりついて抱き起し、額をおさえ、

「傷の具合はどうですか」

と問いました。しかし、もう瀕死の状態だといふのに継信は、自分のことはさておいて、

「御主君はどうしておられるか。そなたは体に傷を負っていないか。味方はどのくらい討たれたかな」

と、絶え入りそうな息の下から弓矢をとる武士らしい言葉を吐いています。それを聞くだけでもあわれなことです。忠信は涙をおさえ、

「御主君もわれわれも無事です。いくさは味方の勝利です。義経公がお供をせよとの仰せ

ですので、いっしょにまいりましょう」

と言いますと、

「おお嬉しいこと。この世の最期に御主君と対面してその前で死ぬことにいたそう。つれて行ってくれ」

と話しているところへ、信夫兄弟がかけつけて来ました。そばにあった洲崎の堂の破れ戸

に、継信を抱きのせ、先の方を忠信が、あとの方は信夫が持つて、みな涙ながらに歩いて

いきますが、ちょうどその時、東の山の端に月がほのぼのと出てきました。

①今が最期。

②源義経のこと。

③どうしていらっしやるか。

④あなた。

⑤きず。

⑥つれていってあげよう。

⑦死ぬとき。

⑧あれこれ。  
⑨用意をととのえ。

①「ゆかりの草」は紫草。「ゆかり」に「縁」の意があるので「縁」を言い出すために用いた。

②(涙が)こみあげてくる。

③武士。源平合戦のあった地。

④地名。源平合戦のあった地。

月ほのほのと出でにけり。鷲尾の三郎は、継信が志、血をこそ分けね兄弟と結ぶゆかりの草の縁。死骸をとりおき、  
「首を敵に渡さじ」

と、せき来る涙もものふの、八島をたずね巡りしが、面は血に染みうつぶしに、伏したる手負いのありけるを、

「これやは」

とよく見れば、兜の鍔草摺りまで散り積りたる桜花、鎧の糸をうずみたり。涙に曇る朧月、小桜おどしと心得て、

「これこそは継信殿」

と抱きついてぞ嘆きしが、

「この世ならぬご厚恩、最期の御供と存ずれども、高名もせず

あい果てば、世の人口もそうらえば、よき敵と討死し、やがて

追っつきたてまつらん。今よりは君なくして誰にか見せんわが

姿

と、指副抜いて前髪切り、口おし割って含ませ、

「二世のちぎりの印ぞ」

とまたさめざめと泣きいたり。

⑧みさおをたてる誓いのための作法。

⑤減多にないあつい恩。

⑥手柄をたてて名をあげること。

⑦世間の評判。

さて一方、鷲尾の三郎は、継信とは血はつながらぬものの義兄弟の契りを結んだ仲なので、死骸をそこに置き、

「首を敵に渡すまい」

と、涙をぬぐいながら、八島をたずね歩きました。と、顔は血にまみれ、うつむけに伏した死骸がありました。

「これではないか」

とよくよく見ますと、兜の鍔の草摺りまで散り積った桜の花にうずめられていました。涙にくれながらこれは継信がつけていた小桜おどしの鎧だと思い、

「これこそ継信殿」

と抱きついて嘆いていました。

「またとないありがたい恩を受け、最期まで御供したいと思っていました。高名も挙げずに死んでは、世の人がなんかというかわかりません。よい敵と戦って討死にして、すぐにあの世へ追いかけていきます。これからはあなた様がいなくてこの姿を誰に見せたいのか、どうしようか」

と、指ぞえの刀を抜いて前髪を切り、死体の口を割ってかませ、

「これが二世のちぎりの印です」

とまたさめざめと泣いていました。

①命令。前出。

かくとも知らずで弾正太郎、継信を殺し鬱憤を晴らさんと、夜半にまぎれて歩きしが、この体をきつと見て、

「やあ鷲尾か。君よりの御諚には、『継信深手を負うたるよし、敵に首をとられ見ぐるしき死にをさせんより、腹切らせ首打つてまいれ』との御ことなり。そこ立ち退け」

と太刀ふり上ぐる。鷲尾手負いに立ちおおい、

「ああ、しばらくしばらく。『深手負うたらば看病せよ』とこそあるべけれ。『腹を切らせよ』とは心得ず。殊に忠信、それがしをさしおき、遺恨深き貴殿に仰せつけられんやうなし。死骸はわれわれかたづけ申す」

と言えは、

「さては御諚を軽んずるか」

「いやさ何にもせよ、継信が首御辺には打たせぬ」と言う。

「ええわっぱめ、小癩もの」

と、打ってかかるを受けければ、さんざんに追っ立て、走り返って首打ちとり、行方知らずなりにけり。鷲尾続いてたち帰り、

②いつまでも残るうらみ。

③なまいきなやつ。

そういうことも知らず弾正太郎は、継信を殺し鬱憤を晴らそうと、夜にまぎれて歩いていましたが、この様子を見て、

「やあ鷲尾。御主君からの命令で、『継信は深手を負っているそうだが、敵に首をとられて見ぐるしい死に方をさせるより、切腹させ首を打って来い』ということになった。そこをどけ」

と太刀をふり上げました。鷲尾は手負いの死体の前に立ちはだかりながら、

「ああ、しばらく。『深手を負うたらば看病せよ』というはず。『腹を切らせよ』とは不審じゃ。ことに忠信殿が、わたしをさしおいて、遺恨のあるそなたに仰せつけられるはずがない。死骸は私がかたづけます」と

と言いますと、

「さては、主君のご命令を聞かぬつもりか」

「いや、どうあれ、継信殿の首をそなたには打たせませぬ」と言い合いました。

「ええい、わっぱめ、小癩な」

と、打ってかかるのを、さんざんに追い立て、走り返って、死体の首を打ちとり、行方知らずになりました。鷲尾はそのあとからもどつてきて、

①深山にはえてある木。黒革おどしの鎧を桜の幹にみたてている。  
②敵か味方かを見分けるために袖につけた、布でできたしるし。

「南無三宝、敵にさへ取らせぬ首、味方に取られし口惜しさよ。せめて死骸を葬らん」

と、ひき起こせばこはいかに、鎧についたる桜花ばつと散つて、小桜と見えしはもとの深山木や、黒革おどしの鎧なり。袖標をちぎって見れば、能登殿の郎党、筑紫の孫六安国と記せり。

「ふふ、さては継信殿にてなかりしな。まづ嬉し」  
とさして行く塩屋のかたへぞ急ぎける。

すでに夜半のときも過ぎ、ご本陣には義経諸大名列座あり。継信が噂のみ、

「いかなりける。不便や」

と、大將心を悩し給うところへ、

「佐藤継信をめし具せし」

と言上すれば、

「それ此方へ」

とよせさせ給い、御膝を枕とせさせ、

「さてもさても不便のものありさまや。いかに継信、おことは義経が命に代りもはや死せしと思いに、生顔見たる嬉しさ

「ああ、敵にさへとらせなかつた首を味方にとられてしまった。なんと口惜しいこと。せめて死骸を葬っておこう」

と、ひき起こしますと、あら不思議、鎧についでいた桜の花がばつと散つて、小桜おどしと見えていたのはもとの深山木のような黒革おどしの鎧でした。袖の標をちぎって見ると、能登殿の家来の筑紫の孫六安国と記されていきました。

「ふふ、さては継信殿ではなかつたのだ。まづは嬉しいこと」

と塩屋の方をさして急ぎました。

ご本陣では、すでに夜中を過ぎていきました。義経をはじめ諸大名が並び、

「継信はどうなった。かわいそうなことをした」

と、義経は心を悩ましていました。そこへ、

「佐藤継信を連れてまいりました」

と申し上げるものがありました。

「はやく、こちらへ」

と呼び寄せ、義経の膝を枕にさせ、

「ほんとうに不憫なことをした。継信、そなたは義経の命に代わってくれた。もう死んだかと思っていたのに、生きている顔を見るとができて嬉しい。心配なことはないか。国もとへ言うことがあったら何でも言え。たくさん侍はいるが、私を親と思えと父の庄司からあずけられたそなたゆえ、この義経も今日まで命を二つ持ったつもりでいたが、今そなたと別れねばならぬとはなんと悲しいことではないか」

③かわいそうなこと。

よ。心にかかるとはなきか。国もとへ言うことあらば何事  
なりとも申しおけ。諸侍は多けれど、親とも子ともそれがし  
を、父の庄司が頼みしゆえ、義経も今日までは、命を二つ持  
つたりしが、ただ今なんじに別れんことの便なさよ」  
と御落涙ぞありがたき。

ややあつて継信眼を開き、名残惜しげにお顔を見上げ見  
ろし涙を流し、

「かたじけなし」

と言う声も、しどろにもつれかすかなり。忠信涙にくれてい  
たりしが、手負いに力をつけんため、

「ええ、言いがいなし、継信殿。権五郎景正は鳥海に眼を射ら  
れ、七日が内に答の矢を射返ししとうけたまわる。それほどに  
こそあらずとも、などや御前にて返答はのたまわぬぞ。かたじ  
けなくも枕もとは相伝のわが君。弓手は秩父馬手は和田、土肥  
・佐佐木・武蔵坊、こう申すは弟の忠信にて候う」

と声を荒げ、言いければ、継信は枕をもたげ、

「何じようその景正に劣るべきにあらねども、三国に隠れなき

①ふがいない。『奥州後三年記』によると、後  
②鎌倉権五郎。『奥州後三年記』によると、後  
三年の役に八幡太郎義家の家人として十六歳  
で従軍。このとき、鳥海弥三郎に左目を射抜  
かれたが、ひるむことなく即座に答の矢を射  
返してこれを倒したという。

③代々仕えた御主君。

④決して。必ず。

と涙を流しました。

しばらくして継信は眼をあげ、名残惜しげ  
に義経の顔を見上げたり見おろしたりして、  
涙を流し、

「ありがたいことでございます」

と言うその声も、しどろもどろになりかすれ  
ていました。忠信も涙にくれていましたが、  
手負いの兄に氣力をふりしほらせようと

「ええ、ふがいない。継信殿。権五郎景正は  
鳥海弥三郎に眼を射られたが、七日のうちに  
矢を射返したと聞いている。それほどではな  
くとも、どうして御前で返答ができぬのじゃ  
もったいなくも、枕もとにいるのはわれらが  
御主君義経公、左手にいるのは秩父殿、右手  
は和田殿、土肥殿・佐々木殿・武蔵坊殿、こ  
うして話しているのは弟の忠信ですぞ」  
と声をあらげました。継信は枕から頭  
を上げ、

「その景正に劣るつもりはないが、あの大力  
で有名な能登守の矢を胸のまん中で受けとめ  
この継信だからこそものをいうことができる  
のじゃ。」

① 敵味方をおどろかせ。

② 思いが残って。

③ 戦いに勝って引き上げること。

④ 「雪折」は若くして死ぬこと。若い者が先に死ぬ、普通とは逆の運命。

⑤ 同僚。  
⑥ 無礼。  
⑦ 「濤標」は、船が通るのに適した深い水脈を知らせるために立てた杭。案山子も濤標も立つものであるが、人が立てればこそ立つものである、の意。  
⑧ 全く気にしていないが。

⑨ 以前からの覚悟。

⑩ そなた。

⑪ 別れの挨拶。

能登の守の太矢を直中に受けとめて、継信なればこそものをば申せ。敵味方の目をさまし、しかもわが君の御膝にて死する継信が、何に心がひかされて、言うべきことのあるべきぞや。ご凱陣の御供して、奥州に下向せば、『継信こそはわが君のご用に立ち、源平の目を驚かし死したれば、雪折竹の逆まの世を嘆かせたまふな』と、随分孝行つくせよえ。形見は日ごろ書きおいて、守袋に残せしぞや。やれ忠信。男は高きも卑しきも、若きとて人ゆるさず。短気は未練の初めと知れ。君に不忠存ずるな。朋輩達に慮外をすな。野中の案山子濤標も、ひとりは立たぬ世の中ぞ。必ず人に憎まれな。やれ妻子をも常常は、ふつつと思ひ切りしかど、恩愛の捨てがたさは、ただ今のなつかしき。継信ほどのものなれど、かねて覚悟も最期には変わるものとは今ぞ知る。これもおことが手本のため、語りおく」とばかりにて、絶え入る眼の中よりも、涙をはらはらと流し、「言うべきこともこればかり。いとま申してわが君さま、これまでぞ弟。秩父・和田殿・武蔵殿はおわせぬか。忠信に目かけてたび給え。南無や西方弥陀如来」

敵味方を驚嘆させ、しかもわが君のおん膝枕で死ぬ継信が、これ以上何の気がかりなことがある。なにも言うことはないぞ。凱旋の御供をして奥州に帰ったならば、『継信は主君のお役に立ち、源平を驚嘆させ、死にました。親子は逆縁になりましたが、嘆かないでください』と申し上げよ。そなたが孝行をしてくれよ。形見は前から書きおいて守袋に残してある。忠信、男は身分の高いものも卑しいものも、若いからといって人は許してはくれぬ。短気は未練の初めと思い、君に不忠をするではないぞ。仲間達を裏切ったりするな。野中の案山子も濤標も、ひとりでは立っていない切つていたつもりだが、今になるとなつかしい。この継信ほどのものでも、いくら覚悟していたつもりでも、死を目前にするとやはり変わるものだということがわかった。これもそなたへの手本のために語るのじゃ」と言つて、息絶え絶えになりながら、さらに涙をはらはらと流し、「もう言うべきことはこれだけでございます。おいとまいたします。義経様。もうこれまでだ、弟よ。秩父殿、和田殿・武蔵坊殿はいらっしゃらぬか。忠信に目をかけてやってください。南無や西方弥陀如来」

①享年は『源平盛衰記』によれば、二十八歳。

②主君の側近くに仕える者。

と、手を合わせ目をふさぎ、惜しがるべきは年のほど、三十三のまぼろしも、八島の磯の波の泡、消えてはかなくなりけり。忠信わつとりつけば、君をはじめたてまつり、近習下部にいたるまで、一度に、

「これは」

と声を上げ、惜しみ嘆くぞ道理なる。

判官御涙の下よりも、

「捨て果てし身もながらへて、あればある世にいかなれば、惜しまるる身はとどまらぬ。いかなる縁にか主となり、いかなるものが下人となり、かかるあわれを見ることよ。父義朝は知らねども、兄鎌倉殿蒲殿に別るるもかくあらん。来世も必ず主従ぞ」と、かたじけなくも継信が死骸にすがらせ給いければ、鬼をあざむく弁慶も、むせかえりむせかえり声を惜しまず嘆きける。

かかるところへ弾正太郎あわただしくかけ来たり、

「すは御大事こそ出来そうらえ。鷲尾の三郎は継信に離れ、味方に力なきゆえに平家へ忠心と存じ候う。その子細はただ今敵の忍びのものそれがし討ちとめ候うところに、かえってそれがし

と、手を合わせ目をとじました。

まことに惜しい若武者です。享年三十三歳、その命は八島の磯の波の泡のように消えてはかなくなつたのです。忠信がわつと死体にとりつきます。義経をはじめ、居合わせたものはみな、一度に、

「これは」

と声を上げ、惜しみ嘆いていたのは、当然でありましょう。

義経は涙を流しながら、「いつ死んでもいいと思うこの身はいつまでもこの世にあるのに、どうして、死んでほしくない者が先立つていくのであろう。ああ、どんな因縁によって主となり家来になるのであろうか。そして主となつたものはいつものうしてつらい思いをしなければならぬことよ。父義朝のことはともかく、兄頼朝殿や範頼殿との別れもこんなふうになってくるのであるうか。継信、来世もわれらは必ず主従じゃぞ」というありがたい言葉とともに、継信の死骸にすがって嘆かれる姿に、鬼をあざむく弁慶も、むせかえりむせかえり声を惜しまず悲しんでいました。

と、そこへ、弾正太郎があわただしくかけ込んできました。

「さあ、一大事でございます。鷲尾三郎が継信と離れ離れになり、味方が頼りないというので、平家に寝返つたようでございます。と申しますのも、敵のスパイを討とうとしましたところ、かえって私に敵対いたし、斬り合いになりましたが、なんとか切り抜け敵を討ちとめ

③以下原文「兄かま殿かば殿わかりも」を近松全集により訂正。

④源頼朝のこと。

⑤源頼朝のこと。源義経の異母兄。治承・寿永の乱では、源義仲・平氏追討で軍功をあげるのちに頼朝に謀反の疑いをかけられ、罰せられ殺された。

① 主君の近くに参上してひかえること。

② とりかこむ。

③ 大勢のなかで一人が間違った行動をすすると外の大勢も間違った行動をとってしまうことの外と見え。

④ そなた。

⑤ 私。

⑥ そしる。

⑦ 敵方に通じたもの。スパイ。

に敵対をいたし、すでに太刀打ちにおよびしを、とかく切り抜け敵は討ちとめ候う」

と、以前の首をさし出す。鷲尾続いて伺候すれば、人人一度にはらりと立ち、鷲尾をとりまわす。三郎少しも騒がず、

「ああこれこれ、お騒ぎ候うな。まったくさように候らわす。

これ安西、『一匹の馬が狂えば千匹の馬を狂わす』とは御辺がことよ。それがしを讒するのみか、死したる敵の首とって忍びのものを討つたるとはいかに」

弾正聞きもあえず、

「しからばなんじは敵の首とるそれがしに、何とて討つてかかりしぞ。これ二心の証拠」

といえは、一座の人々、

「鷲尾いかに」

とつめかけける。鷲尾涙をはらはらと流し、

「申し上ぐるも悲しやな。情の兄の継信が行くえをたずね出するにぞ、心も乱れ散る花にうもれし鎧を、継信が小桜おどしと目もくらみ、嘆き沈みし折りから、『継信が首討つてとの御詫

ました」

と、最後の首をさし出しました。続いて鷲尾もやってきましたので、人々はみな立ちあがり、鷲尾をとり巻きました。しかし、鷲尾三郎は少しも騒がず、

「これこれ、お騒ぎなさるな。まったくちがいます。これ、安西、『一匹の馬が狂えば千匹の馬を狂わす』とはそなたのことじやな。わしを讒言するだけではなく、死んだ敵の首をとってスパイを討ちとつたとはどういうことじや」

弾正聞く間もなく、

「では、そなたは敵の首をとつたわしにどうして討ちかかってきたのじや。これこそスパイの証拠ではないか」

と言いますと、一座の人々は、

「鷲尾、なぜじや」と問い詰めました。鷲尾は涙をはらはらと流し、

「申し上げるのも悲しいことながら、義兄弟の契りを結んだ継信殿の行くえをたずねて、心も乱れ、散る花にうもれていた鎧を継信殿の小桜おどしの鎧と勘違いし嘆いておりましたところ、『継信の首を討つてというご命令じや』と言つて理不尽に斬りとつて帰つたのでございます。その証拠にその首の口を割つて見てください。鬚の髪があるはずでございます」

⑧ 義理の兄。

① 鏡の胴を吊るために両肩にあてる中のせまいところ。肩土。

② 動物にも劣っている。

③ 死者を葬るとき、迷わず成仏できるようにと法語（仏道を説いたことば）を唱えること。

④ 阿修羅のすむ、争いの絶えない世界。天・人と地獄・餓鬼・畜生との間にあるという。「阿修羅」は仏法の守護神とされる一方、人間以下存在とされ、絶えず闘争を好み、地下や海底にすむという。

⑤ 「陀羅尼」は梵語の呪文をそのまま唱えるもので、一字一句に限りない深い意味があり、これを唱えればすべての障害がのぞかれ、種々の功德が得られるという。「真言」はその短いもの。

なり』とて、理不尽に斬りとつて帰り候う。証拠にその首の口を割って見給え。鬢の髪の候うべし」

と、申しもあへぬに忠信、口おし割って見てあれば、一総の黒髪あり。弁慶ものも言わずにつつと立ち、安西が綿上掴んで、

「ええ畜生劣りの悪人。問答するも無益の沙汰」

と、木戸の外へかっぱと投げ、

「ああ構うな忠信。構うな鷲尾。まず継信を弁慶が引導してとらせん」

と、やがて衣を着しける。義経をはじめ大名小名残りなく、死骸に手をかけ給いける。そのとき弁慶珠数おしもみ、

「なんじ元来鉄石のごとし。極楽もいや地獄もいや、修羅道に逗留し、討たれて死する平家の勢と、冥途にて合戦して、釈迦

弥陀のねむりをさまし、行きたい方へつつと行け」

と、陀羅尼真言くりかけくりかけくりかけ読みかけて、  
「野辺に送れる春の夢、覚めてののちの末の世まで、ためしま

れなるもののふや」

と皆感ぜぬものこそなかりけれ。

と、言い終わらないうちに、忠信が口を割ってなかを見ますと一ふさの黒髪がありました。弁慶はものも言わずにつつと立ちあがり、安西のよろいの肩をつかんで、

「ええ畜生にも劣る悪人め。問答するも無益のことじゃ」

と、木戸の外へかっぱと投げつけ、

「ああ、構うな忠信。構うな鷲尾。まずこの弁慶が継信に引導を渡してからじゃ」

と、おもむろに衣を身につけました。義経をはじめ居合わせた大名小名はみな死骸に手かけました。弁慶は珠数をおしもみ、

「そなたは元来鉄石のようであった。極楽もいや地獄もいやというなら、修羅道に逗留し、討たれて死んだ平家の勢と冥途で合戦し、釈迦弥陀のねむりをさまし、行きたい方へつつと行け」

と、陀羅尼真言をくりかえしくりかえし読みました。

「野辺で過す春の夢のようにはかない人生が終つてのちの末の世までも、まことに例のない武士であった」

と皆皆感心しないものではありませんでした。

門出八島 第四段

①あじわいのあるように庭を作ること。また、その庭。  
②庭の岩の配置。  
③庭に小川や池を作り、外から水を引き入れて流れるようにしたもの。  
④榛名湖のことという。歌枕。群馬県にある。  
⑤枝ぶりのよい松。  
⑥血のような赤色。  
⑦さようございます。  
⑧弟継信の命運を暗示している。

かくてそののち、佐藤庄司のお館へは嘆きをはばかり、忠信よりわざと便もせざりければ、庄司一家の人人は夢にもかくと知りたまわず。胎内にて別れつる継信が一子、誕生せしを次若と名づけ、西国よりの便をば、明けぬ暮れぬと待ち給う。兄弟はつねづね作庭を好みしに、

「凱陣せば見すべし」

とて、さまざまの木草を植え、岩ぐみ遣水心をつくし、伊香保の沼よりふりよき松を見立てさせ、あまたの人夫持ち来たる。

庄司夫婦二人の嫁、庭において見給えば、松の枝血に染まり、朱になつて見えければ、人々気にかけて人夫を召し、

「いかなることぞ」

と仰せける。人夫うけたまわり、

「さん候う。以前は軽く見えしゆえ、人夫二人にして持ちければ、拔群に重くしてとり落し、先の夫は何事なく、次の夫が打

佐藤庄司の館には、悲しい知らせなので、忠信からはわざと便りもしませんでした。ですから、一家の人々は継信の死をまったく知りませんでした。

継信が戦に出たあとで生まれた子を次若と名づけ、西国からの便りを明けても暮れても待つていました。兄弟はつねづね庭作りを好んでいましたので、

「凱陣して来たら見せてやろう」

と、さまざまの木や草を植え、岩の組み方や遣水にも心を配り、伊香保の沼から姿のいい松を見立ててあまたの人夫に命じて持つてきたものです。庄司夫婦と二人の嫁が、庭において見ますと、松の枝が血に染まったように赤く見えます。人々は気になつて人夫を呼び、「どうしてか」

と問いただきましたところ、人夫は、「はい、そのことでございます。以前に見たとき軽く見えましたので、人夫二人で持ちあげましたところ、これが意外に重くてとり落してしまいました。そのとき、先の人夫は何でもなかったのですが、あとの人夫が怪我をして散々の目にあつたのでございます」

たれて傷をこうぶり、散散のこと」

と言う。

早姫驚き、

「やあ、何という気がかりや。言いなおせ」

とありければ、

「はて何とお聞きなさる。この松の木をとり落とし、先の夫は何ごとなく、次の夫が打たれ候う。定めて命はあるまい」

- ① 偶然に起ったことで将来を予想する占い。
- ② しらけて。
- ③ 松にあらわれた辻占の意味をとりかえ。
- ④ 先の「松の枝血に染ま」った辻占を、「松」「小松殿（＝平重盛）」ととり、それを継信が討った、ととりかえた。

と、ものが言わせし辻占はのちにぞ思いあたりける。人人興さめ顔を見合わせしばしことばもなかりしが、庄司縁をとりかえ、「おおめでたしめでたし。小松は平家の大将継信が討つたるぞ。よろこびの酒宴せん」

と奥に立ち入り給えども、早姫なおも落ちつかず、所詮わが兄の志田の三郎殿を頼み、この子を連れて西国へくだらんと、旅の営みそこそこに、次若をかき抱き、兄の庵に忍び行き、とかく語らい、兄弟は西国方へと急がるる。

と返事しました。早姫は驚き、「ああ、何やら気がかりなこと。もう一度くわしく聞かせてください」というので、

「はて、どういうことでしょうか。この松の木をとり落したため、先の人夫は何もなく、次の人夫が打たれたのですが、きつと命はあるまいと思います」

と、誰が言わせる言葉なのか、この辻占はのちに思いあたることになるのでした。

人々は興ざめ顔でしばらくは言葉もなくいましたが、やがて、庄司が、

「おお、めでたいことじゃ。小松とは平家の大将のこと、それを継信が討つたのであろう。では、よろこびの酒宴をいたそう」

と奥に入りましたが、早姫は依然として胸騒ぎがして、なんとか兄の志田三郎に頼みこんで、この子を連れて西国へくだらうと思いいちました。旅の用意もそこそこに、次若をかき抱き、兄の庵にこっそりと行き、わけを話して兄妹は西国へと急ぐのでした。



- ①旧国名。今の愛知県東部の。
- ②旧国名。今の愛知県の西部。
- ③旧国名。今の三重県の大平。
- ④三重県鈴鹿郡岡町にある真言宗の寺。宝蔵寺。行基または一休宗純作と伝えられる地蔵尊がある。
- ⑤すたれさせるな。
- ⑥滋賀県東部、甲賀郡の町。
- ⑦琵琶湖。
- ⑧八王子山。滋賀県大津市にある山。
- ⑨日吉神社。山王。滋賀県大津市坂本にある。
- ⑩日吉（ひえ）神社の神の使い。
- ⑪「山王」は日吉神社のこと。「まさる」は「神猿まさる」で、日吉神社の神の使いである猿のこと。
- ⑫滋賀県竜王町の地名か。
- ⑬京都市東淀川区の地名。昔は京都と西海との航路にあった港で、遊女もいて、繁昌した。
- ⑭兵庫県尼崎市の地名。神崎川の河口。昔、江口とともに京都と西海との航路にあった港で、江口と同じく遊女もいて、繁昌した。
- ⑮「ちはやぶる」神代もきかず竜田川（からくれなひ）に水くぐるとは「をふませる」。
- ⑯竹の節を抜いて作った樋をつないで水を通し、水道として用いたもの。
- ⑰神戸市須磨区の、鉄樹山・鉢伏山が海岸に迫る地域。北に鶴越（ひよりごえ）があり、寿永三年（一一八四）に源義経が平家軍を攻めた古戦場として有名。
- ⑱不明。
- ⑲兵庫市の地名。大和田泊（おおわたのとまり）。「三つ羽」は矢羽根を矢の幹の三方につけること。「八島」の「八」と「矢」をかける。「八島の浦」は、香川県高松市にある島山。源平の古戦場で有名。
- ⑳とびら。
- ㉑むやみに。

①みかほ 三河の国、過ぎて尾張の渡舟、乗りて走りて伊勢もはや、とま  
 ④せき らぬ関の地蔵堂、似合い似合いのつま授く、誓くちすな、くち  
 なばくちよ、わが中の恋はうずまぬ土山や。⑦おうみ 近江の湖は春ふけ  
 て、水のみどりも影うつる。しげりし峰は八王子。⑨にじゅういっしや  
 神所。猿は山王まさるめでたき、み代のしるしは松本の松は  
 ⑩さる ⑪さんろう  
 鋭く柳は端手に、竹はしなえて伏見の里、江口・神崎・西の宮  
 ⑫さる ⑬さんろう  
 夕日のにしき唐紅に行く水をくぐりくぐりくぐり、くるくるく  
 ると水くぐる、かけいづたいの里を越え、川を越えつつ山越え  
 て、谷を越えても一の谷、また二の谷三の谷、ここもこのたび  
 つわものの兵庫の津より追い風の船は三つ羽の八島の浦。浦波  
 かけてあしふける柴の庵に着き給う。  
 「庵の内へもの申さん」  
 とあれば、主の女とぼそをあけ、  
 「このところは源平の合戦いまだ治らず。他国の人にはむさと  
 ⑲いさかた 宿はまいらせず。何方より」  
 と問ければ、志田聞きて、  
 「われわれは出羽の国佐藤がゆかりのもの。いくさの次第兄弟

平元結で結びたくなるような名の黒髪山から、  
 分け行くすえは武蔵野の、草にあこがれ露に  
 寝て、四五日のあいだ見なれていた富士とわ  
 かれて三河の国へ。これも過ぎて尾張の渡し  
 舟。乗って走って伊勢もはや足をとどめずに  
 関の地蔵堂までやってきた。お互い似合いの  
 夫婦を授けるといふ誓いを無駄にするな。私  
 の恋をここにうずめることはしないでおうこ  
 う土山よ。近江の湖は春も深くなり、水のみど  
 りに影がうつる。しげつてゐる峰は八王子。  
 二十一社の神所。山王様のお使いの猿ではな  
 いが、どこよりもまさるめでたき、み代のし  
 るしは松本の松。松は鋭く柳は端手に、竹は  
 しなえて伏見の里、江口・神崎・西の宮。夕  
 日のにしき唐紅に行く水をくぐりくぐりくぐ  
 り、くるくるくると水くぐる、かけいづたい  
 の里を越え、川を越えつつ山越えて、谷を越  
 えても一の谷、また二の谷三の谷、ここもこ  
 のたび「つわもの」の名を負う兵庫の津から  
 追い風を受ける船は、三つ羽の矢ではないが  
 八島の浦の浦波を一気に渡り、葦をふいた柴  
 の庵に着きました。  
 「もし、庵の内にとなたかいませんか、もし」  
 と声をかけますと、主人らしい女が戸を開け  
 て、  
 「ここは源平の合戦がまだ続いていますので、  
 他国の人に簡単に宿を貸すわけにはいきませ  
 ん。どちらからいらつしやいましたか」  
 と問いかけました。志田三郎が、  
 「われわれは出羽の国佐藤兄弟のゆかりの  
 ものです。いくさの様子や兄弟のことを聞き

がありさま聞かまほしく、はるばる上り候う」

と言え、彼の女聞きもあえず、

「さてはさように候うか。みずからはこのところの狩人鷲尾の

三郎と申すものの姉なるが、継信様のおかげにて弟は源氏の侍

となり、御恩を受けしもの候う。いくさはいまだ終らねども、

平家は大方ほろびしよし。継信様の御ことは能登殿の矢にあた

り、果て給うとやらん聞きしかど、女なれば戦場へ出たるこ

ともそうらわず。くわしくは存ぜぬなり。いざ弟の鷲尾が陣所

へともない、直に様子を問い給え」

と言え、志田よろこび、

「しからば御伴申さん」

と、早姫次若庵に残し、かの女とうち連れて陣所をさしてぞ

急ぎける。

痛わしや、早姫は次若をかき抱き、

「主の女の物語、もしまことならばいかがせん。あわれいつわ

りなれかし」

と、たより待つ間の待ち遠く、袖も心もくずおれて、とろりと

たいと思いはるばるやってきました」

と言いましたところ、その女はすぐに、

「そういうことでしたか。私はこのところに

住む狩人鷲尾三郎というものの姉でございます

すが、継信様のおかげで弟は源氏の侍となり、

恩を受けたものでございます。いくさはまだ

終わってはいませんが、平家は大方ほろびた

そうでございます。継信様は能登殿の矢にあ

たつてお亡くなりになったとか聞いておりま

すが、女ですので戦場へ出たわけでもござい

ませんが、くわしいことは存じません。弟

の鷲尾の陣所へいっしょに行き、そこでじか

に様子をお聞きくださいませ」

と言いました。志田はよろこんで、

「しからば御供いたしましたよう」

と、早姫と次若を庵に残し、その女と連れだ

つて陣所をさして急いで行きました。

ああ、いたわしいこと、早姫は次若をかき

抱きながら、

①うつらうつらとした浅いねむり。  
②乗馬のとき、手綱をつけるために馬にかませる金具。

③よい。

④元気がないさま。

ろりのあだねぶり。枕が上に駒の足並。くつわの音に夢さめて、庵の内に入り来たるを見れば、夫の継信小桜おどしの物の具かため、しおしおとして見え給う。

「のう、わが夫か、継信殿か」

と抱きつき、うれし涙を流せしが、ややあつて、

「能登の守の矢にあたり、ご最期とも聞きしゆえ、いかばかり案ぜしが、これは嬉しき御こと」

とあれば、

「おお、すでに死なんとしけれども、胎内にまき捨てし情の胤のみどり子に、心ひかれて潮時の、夜に三度日に三度、いくさのひまはなけれども、しばしのいとまたまわりて、これまでは来たりし」

と、またさめざめとぞ泣き給う。

ときに山鳴り谷こたえ、天地六種に震動して、大地もさくるごとくなり。次若わつと泣きければ、

「いや、苦しからず。またこそ平家がよせ来る。一いくさしてかけ散らさん。見物せよや」

⑦気にしなくてもよい。目下の人に無礼を許すときの言葉。

⑥仏教で、仏が説法をするときのためでたい現象で、天地が六種類の震動をおこすという。

と、枕上に馬の足音がします。その音に夢からさめ、庵の内に入って来る人の姿を見ると、夫の継信が小桜おどしの鎧に身をかため、うなだれて立っています。

「おお、わが夫の継信殿か」

と抱きつき、うれし涙を流しましたが、やがて、

「能登の守の矢にあたり、ご最期を遂げられたと聞きましたので、どんなにか心配していましたが、生きていたとはなんとも嬉しいことでございます」

と言いますと、

「おお、ほとんど死にかけていたのじゃが、胎内にいる子供に心が残って、いくさに休みはないものの、しばし休暇をいただいでこまでやって来たのじゃ」

と、またさめざめと泣くのです。

と、そのとき、山が鳴り谷が響いて、あたりじゅう震動し、大地も裂けんばかりです。次若がわつと泣き出しましたので、

「いや、なんでもない。また平家が攻めてきたのだ。一いくさしてかけ散らしてこよう。見ておれよ」

①公卿。  
②人が多く集まっているようすを言う。  
③怒り。

④三月。

⑤戦い。

⑥仏教で、須弥山（しゆみせん）の南方にあるとされる島。人間の住む世界で、ここで諸仏に会い、仏法が聞けるといふ。

⑦仏教で、人間の本性をそこなう色（しき）・声（しょう）・香（こう）・味（み）・触（そく）。  
⑧仏教で、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根に関する欲望。

⑨仏教で、父・母・阿羅漢（仏教の修行で最高段階に達した人）などを殺すような、五種の罪悪。  
⑩晴れることのない執念。

⑪夫婦。

とうち出ずれば、平家はよせくる波の面に、大将をはじめとし一門の月卿雲霞のごとく、瞋恚のほこ先我慢の剣。やいばをそろえあらわれし、空の景色もひきかえて弥生なかばの春の色。

「今日の修羅の敵は誰ぞ。おお能登の守教経よ。あらものものし。手なみは知りぬ。その一念のうらみの矢先。思いぞ出する壇の浦の、その船いくさ。今もまた、閻浮にかえる生死の、海山一同に震動し、五塵六慾の風立って、生死の海の厚氷、とくれば味方むすべば敵」

走りかかってはっしと打つ。打たれてさつと引汐の、またさしくるは五逆の太刀、なお妄執の山めぐり、消えて形はなかりけり。継信庵に走り入り、

「見給いたるかあのごとく、日夜のいくさはしげけれど、妹背のちぎり、この若に会いた見たさに、来たりし」と、次若膝に抱きのせ、涙にくれて見えにけり。

かかるところへ志田の三郎鷺尾兄弟、忠信もろとも帰らるる。早姫走り出で、

「のうおそかりし。継信殿も待ちかねて、御入り候う」

と言いながら出ていくと、平家方はよせてくる波の上に、大将をはじめとし一門の人々が雲霞のように、怒りと意地の眼差しで刃をそろえてあらわれてきました。空の景色は、これまでとかわり、弥生なかばの春の様子です。

「今日の戦の敵は誰じや。おお能登守教経か。なんともものしい。やつの手なみはわかっおてる。うらみの一念がこもったその矢先。思い出されるのは壇の浦の船いくさ。今もまたこの娑婆に立ちかえつて、生き死にを賭けた戦いをすれば、海も山もいつせいに震動し、五塵六慾の風が立ち、生死のさかいの海に張る厚い氷。それが解ければ味方、張れば敵じや」

と言って、走りかかってはっしと打ち、打たれてさつと引き、引いたかと思うとすぐまた向かってくるのは五逆の太刀。なお妄執で山をめぐるうちに、敵も味方も姿が消え、形もなくなってしまうました。継信は庵に走り入り、

「見たか、あのように、日夜はげしいいくさをしてるが、夫婦の仲は忘れず、また、この子に会いたがためにこうして来たのだ」と、次若を膝に抱きのせて、涙にくれていました。

そこへ、志田三郎が鷺尾兄弟や忠信といっしよに帰ってきました。早姫は走り出で、「ああ、遅うございましたな。継信殿は待ちかねて、中に入っております」

と言う。人々驚き、

「死してほどふる継信これにありとは夢ばし見たるか、うつつか」

と言えは、

「はて、最前よりおいでにて、次若を寵愛します。まず入つて会い給え」

と言いけるにぞ、なおしも不審晴れねども、庵に立ち入り見給えは、南無三宝、継信が面影は小桜おどしの物の具に、次若ばかり抱きつき、ありし形はなかりけり。早姫、

「これは」

とすがりつき、

「のう継信殿、わが夫」

とよべど叫べど、かいぞなきものの、あわれの限りなり。早姫涙のひまよりも、くどき給うぞ道理なる。

「さてもさても、みずからほど世にあさましきものはなし。かりそめになれまいらせ、三年に足らで別れしこと、宿世いかなる報いぞや。せめて恩愛の好みには、今一度『次若か、わが妻

と言いますと、人々は驚き、

「死んですいぶんたった継信がここにいるとは。夢でも見たのか。それとも本当か」と聞きました。

「はて、さつきから中においてになって、次若をかわいがっております。まず入って会ってください」

と言うので、不審は晴れませんが、庵に入つて見ますと、南無三宝、継信を思わせるものといえは小桜おどしの鎧だけで、次若がそれに抱きついており、継信の姿はありませんでした。早姫は

「これはどういうこと」

と鎧にすがりつき、

「のう、継信殿、わが夫よ」

と呼びましたが、なんのこいもありません。まことにあわれを誘う光景であります。早姫が涙を流しながら嘆くのも道理であります。

「さてもさても、私ほど不幸なものはこの世にいないでしょう。たまたま夫婦になり、三年もたたぬうちに別れてしまうとは前世からのどんな報いがあることなのでしょう。どうして、もう一度『次若よ、わが妻よ』と言葉をかけてくださらなかったのでしょうか。ああ、継信殿、継信殿よ」

①驚いたり失敗したりしたとき、また事がうまくいくようにと祈るときに発することば。しまった。

②みじめである。

③前世からの因縁。

①もてなし。

②不安に思つて。

③亡くなった。

④涙を流してひどく悲しむ。

⑤夢心地のうちに。

⑥手首。

⑦よろいの胴の下部にとりつけ、垂れ下がるようにしてある部分。ふとももを守る。

か』と、などやことばをかけたまわぬ。なう継信殿継信殿」と、かいなき鎧に抱きつき、伏し沈みてぞ泣き給う。

「まことに故郷の庄司殿、かくなり給うとはつゆしろしめされずし、『やがて凱陣したまわん』と、明暮待ちわび給うらん。

これにつけても過ぎしころ、造庭をきれいにとて、ふりよき松をもとめ給い、兄弟が帰りなば、馳走に植え置き見すべしとて、あまたの人夫もち来たり、重くて過ちしたりしと、言いしことばの気にかかり、心もとのう思われて、とりあえず上りしが、空しくならせ給うとの、さては告にてありしよな。生は死のもとい、会うは別れと言いながら、思えば思えば悲しや」

と流涕こがれ泣き給う。忠信涙をとどめかね、

「さてはうつつに魂の妻子をしたい来たり給うか。などやそれがしにも見えさせたまわぬ、兄上」

と、鎧にすがり嘆くにぞ、鷲尾兄弟ものに騒がぬ三郎も、小手草摺にとりつきて、人目もわかず泣き叫ぶ。目もあてられぬ次第なり。

安西の弾正太郎は、

と、すぐるかいのない鎧に抱きついて泣き沈んでいました。

「本当に、故郷の庄司殿は、こうなつたとは思ひもかけず、『やがて凱旋するはず』と、明け暮れ待ちわびていらつしやるでしょう。

それにつけてもこの間庭をきれいにしました。が、姿のよい松をお求めになり、兄弟が帰ってきたならばもてなすために植えて置き、見せようとたくさんの人夫に持つて来させたのでしたが、重くて取り落とし怪我をしたことが気にかかり、不安になつてとりあえずこうして上つて来たのでしたが、あれは亡くなられたという神のお告げであつたのです。生は死のもとい、会うは別れのはじめとは言いますが、考えれば考えるほど悲しいことでございます」

と泣いていました。忠信は涙をとどめることができぬまま、

「さては兄の魂が妻子をしたつてここに来たのじゃな。どうして私にも会つてくれなかつたのじゃ、兄上」

と、鎧にすがり嘆くのでした。それを見て、鷲尾兄弟も、ものに動じない志田三郎も小手草摺にとりついて人目もはばからず泣き叫んでいましたが、その様子はほんとうに目もあてられぬものでした。

さて一方、ほうり出された安西弾正太郎は、

①ひきつれ。  
②戸。

③しゃにむにはいりこんだ。

④弱みにつけこんで。

⑤命の扱い方に困った。

⑥神かけて誓う言葉。

⑦ネズミ取りの一。ネズミが餌を食おうとした途端、上から板が落ちて、ネズミを殺す仕掛け。

⑧死者の冥福を祈り、供養すること。

「ご前ぜんにて恥辱ちじよくをとり、武士ぶしのまじわりならざるも、いよいよきやつらがなすわざ」

と、一味いちみの悪党あくどうひき具ぐし、あとよりつけて来きたりしが、とほそ蹴破けやぶり無二無三むにむさんにこみ入りにける。

「心得こころえたり」

と忠信ただのぶつぎわか次若つぎわかを抱いだきとる。志田しだ表おもてにかけふさがり、

「ふふ、さては聞きおよびし安西あんざいな。憂うれえに沈しずみし弱よわみをくい、

われわれを討うたんとは。おのれは命いのちに持もちあぐんだな。いくさ

せまいと誓文せいもんは立たてれども、おのれを殺ころすは鼠ねずみぞ」

と、言いうより早はやくひつつかみ、おつぶせ、そばなる大石おおいしおと

つて、背骨せほねにどうどおしかけ、

「さあ鼠殿ねずみどの、ちうとも言え」

と、地獄じごく落おとしにおしつければ、五体ごたい碎くだけて死ししてんげり。なお

も進すすむやつばらを四方しほうへはつとおつ散ちらす。人々ひとびとよろこび立たち

重かさなり、

「日ひごろの遺恨いこんを散さんぜしこと、亡者もうじやも喜よろこび給たまうべし。いざや菩ぼ提だいをとぶらわん」

「御前ごぜんで恥ちをさらし武士ぶしとして交まじわりができなくなつたのは、すべてあいつらのせいじゃ」と、一味いちみの悪党あくどうをひき連れて、あとよりつけて来きて、庵あんの戸かどを蹴破けやぶり、無理無理やり駆かけ込こんで来きました。

「よし、心得こころえた」

と忠信ただのぶつぎわかは次若つぎわかを抱いだきとると、志田しだは表おもてをふさぎつつ、

「ふふ、さては聞きおよんでいた安西あんざいだな。悲かなしみに沈しずんでいる弱よわみにつけこんでわれわれを討うたうとは、そなたはもう命いのちはいらぬのだな。いくさをしまいと誓ちかいを立てていたが、

おまえなどは鼠ねずみを殺ころすのと同じこと」

と、言いうやいなや安西あんざいをひつつかみ、背せに負おい、そばの大石おおいしを取とって背骨せほねにどうと当て、

「さあ、鼠殿ねずみどの、ちゆうとでも言いってみる」

と、地獄じごく落おとしに押しつけましたので、五体ごたいは碎くだけて死しんでしまいました。なおもかかつて

くる家来けらい達たちをも四方しほうへ追おい散ちらしました。人々ひとびとはよろこんで立ちあがり、

「これで長年ながねんの恨うらみが晴はれました。死しんだものも喜よろこんでいることでしょう。さあ、菩提ぼだいを

申まをうことにいたしましょう。」

①信じて、すぐること。  
②浄土宗の開祖。(一一三三～一二二二)

と、

「継信<sup>つぐのぶ</sup>帰依<sup>きえ</sup>したる都法然上人<sup>みやこほうねんしやうにん</sup>を、頼み申<sup>たのもう</sup>さん。此方<sup>こなた</sup>へ」

とて、都路<sup>みやこじ</sup>さして上<sup>のほ</sup>らるる。

源平<sup>げんぺい</sup>両家<sup>りやうけ</sup>の物語<sup>ものがたり</sup>、ものあわれは多<sup>おほ</sup>けれど、かかる例<sup>ためし</sup>は上古<sup>じやうこ</sup>

にも、また末代<sup>まつだい</sup>にもあるべからずと皆感<sup>みなかん</sup>ぜぬものこそなかりけれ。

継信が帰依していた都の法然上人にお願いすることになりました。皆様、こちらへ」と、都をさして上つていきました。

源平両家の物語にはものあわれを誘う話がたくさんありますが、この継信の話は昔にも、これから先にもない話であろう、と感心しないものはないほどでした。

## 門出八島 第五段

①「四海の内」の意。天下。国内。  
②ちよどよいとときに吹く風。  
③馬を走らせて、急を知らせる使者。  
④源頼政の末子。頼朝の傘下で平家追討に活躍。  
⑤後白河法皇の御所。

⑥赤間関。山口県下関の古名。  
⑦今の福岡県北九州市門司区。

⑧平清盛の子。従一位内大臣。木曾義仲の入京を前に、安徳天皇を奉じて西国に逃げるが、壇ノ浦で捕えられ、のち近江で処刑される。  
⑨のこと。

⑩宮中の賢所（かしこどころ）の別名。神鏡を安置し、内侍がこれを守ったことからいう。

⑪天子の印章。  
⑫さしさわりなく。無事に。

⑬（天皇・皇后が）都へはいること。ここでは天皇の印章に言う。

⑭（法皇に）申し上げた。

⑮後白河法皇。

⑯（法皇の）感嘆。感心。  
⑰「兵衛」は天皇の側近くで警護する兵士。「尉」は律令制の四等官の第三位で、公文書の審査などを行なう。

⑱「卿相」は上達部（かんだちめ）、「雲客」は殿上人（てんじょうびと）、「洛中洛外」は都の内と外。すべての人々をさす。

⑲「御簾」は法皇の前にかげられたすだれ。法皇の近くへ行き。

⑳天皇（ここでは法皇）の命令を伝える公文書。

かくてそののち、<sup>①</sup>四海波静かにて国も治る時<sup>②</sup>つ風<sup>③</sup>。早打<sup>④</sup>の使<sup>⑤</sup>として源八広綱院の御所にはせ参<sup>⑥</sup>じ、

「さても九郎判官義経朝敵追討の院宣をこうぶり、八島・壇の浦・赤間・門司が関所関所のいくさに平家一門ことごとく討ちほろぼし、宗盛父子を生捕り、天下太平の御代とまかりなり候う条、内侍所璽のみ箱、ことゆえなく都へ入御なしたてまつるべき」

よし、謹んで奏しける。

法皇<sup>⑮</sup>勸感<sup>⑯</sup>浅<sup>⑰</sup>からず、広綱に兵衛の尉をたまわり、源八兵衛とめされける。卿相雲客洛中洛外、近辺の民百姓、「源氏のみ代は万万歳、千秋楽」

とぞ祝いける。さて、

「広綱は御簾近くまいり、いくさの次第御物語つかまつれ」

との宣旨なり。広綱うけたまわり、

こうして、戦いも終わって、海の波も静かになり、国も治った頃、早打ちの使いとして源八広綱が院の御所に駆け込み、

「九郎判官義経は、朝敵追討の院宣を受けて、八島・壇の浦・赤間・門司の関所での戦いすべて勝ち、平家一門をことごとく討ちほろぼしました。宗盛父子を生捕りにし、天下太平のみ代となりました。内侍所にあつたみしるしの箱も無事に都へ持ち帰ってきました」ということを謹んで申し上げました。

法皇はおよろこびになり、広綱には兵衛尉の官職を与え、以後は源八兵衛と呼ぶようになりました。宮中の公卿も洛中洛外さらには近辺の民百姓に至るまで、

「源氏の御代は万万歳、千秋楽」と祝いました。

その後、広綱には、御簾近くまで来ていくさの模様を語るようにという宣旨がありました。広綱はうけたまわり、

① 放っておけない。無視できない。

② 黒谷は比叡山西塔北の谷で、青龍寺がある。法然上人が浄土宗を開くもとなつたところ。その後法然上人の遺跡を移した鹿ヶ谷西の金戒光明寺（左京区）の地を新黒谷という。  
③ かわりに（追善供養に）おまいりすること。  
④ 仏事を行ない、死者の成仏を祈ること。

⑤ 道理にかなない、感心この上ないことである。

⑥ 「冥加」は神の恩恵。感激の涙を袖で覆うことができないほどの恩恵。

⑦ 念仏行者の臨終には仏が西方から紫色の雲に乗って迎えにくる、ということをおまえる。「紫雲山」は香川県高松にある山。  
⑧ 死者の俗名や戒名を記した木の札。  
⑨ 神仏に供える灯火。  
⑩ 神仏に供える香と花。  
⑪ 阿弥陀の四十八願に因んで、四十八夜の問念仏を唱え、または浄土三部経を講説する行事。  
⑫ 四十八夜の行事が終わること。

⑬ 願い。  
⑭ 同僚。  
⑮ ねたみ。

⑯ 嘆き悲しむこと。  
⑰ 死者、継信のこと。

「宣旨もだしがたくそうらえども、出羽の庄司が忤佐藤継信と申すもの、義経の命に代り討死つかまつって候う。彼が親族、新黒谷にて追善の仏事とりまかない候うゆえ、義経が代参として回向つかまつるべきよし申しつけ候えば、まず黒谷へこそ」と申し上ぐれば、

「もつとも殊勝の至りなり」

と、御いとまくださるれば、広綱よろこび、

「袖にもあまる身の冥加」

と退出するこそゆゆしけれ。

西の迎えの紫雲山、新黒谷には継信が追善とて仏前に位牌を立て、燈明・香華をそなえ、四十八夜も結願にて、早姫・次若参詣あれば、老若男女群集して回向をなすぞ理や。

かくて法然上人はみ弟子あまた左右に具し、高座に上らせ給いける。源八兵衛広綱は義経の名代にて、大黒といふ名馬、判官ご秘蔵ありけるを、継信たびたび所望せしが、朋輩のそねみとてついでにくだしたまわず。ご愁嘆のあまりにや、亡者に贈りひかるると、墓のめぐりを三遍ひいてめぐりければ、馬も毛を伏

「宣旨にそむくわけではございませんが、出羽の庄司の忤の佐藤継信と申すものが義経に代って討死いたしました。彼の親族が新黒谷で追善の仏事を取りおこなうということですので、私は義経の代参として回向してくるように申しつけられております。ですからまず黒谷へ行かねばなりませんので」と申し上げましたところ、

「それはもつともじゃ。まことに立派なこと」と、暇をくださいましたので、広綱はよろこんで、

「身にあまることでございます」と退出していきました。  
新黒谷では継信の追善ということで、仏前に位牌を立て、燈明・香華をそなえ、四十八夜の結願のため早姫・次若が参詣しています。それに続いて老若男女たくさんの人々がいつしよに回向をしております。

法然上人は弟子をたくさん左右に引き連れ、高座にお上りになりました。源八兵衛広綱は義経の名代として、大黒という名馬を連れてきました。判官ご秘蔵のこの馬を継信はなんども所望したのですが、朋輩のそねみを買うからと、ついでにくだされなかつたのです。が、その死を悼んで、亡者に贈る、ということでも継信の墓のまわりを三度ひいてまわったのです。馬も毛を伏せ耳をたれて、しおれている様子はあわれなものがありません。

①熊谷直実。

②あなた。

せ耳をたれ、しおれし風情ぞあわれなる。

しばらくあって志田の三郎参詣す。蓮生座を立て、

「やあご分は志田の三郎か。われこそ熊谷入道よ。命あれば会

うたよな。まずこのたびは力落し。して忠信・鷺尾などは見

えざるか」

「三郎志田」

といへども、さらに返答せず、心静かに回向する。

蓮生座を立て、

「こりや、法師と思ひ近づきをもどすか。奉加帳も頼むまい。

見ぬ顔するな、ひきょうもの」

と言え、

「ええ、かしまし。ひきょうものとは和僧がことよ。この坊主

をひきょうものとはなににごとぞ。やれ侍はな、親兄に離れても、

死骸をおしのけいくさするを武士と言う。忠信鷺尾は継信がう

れいありといえども、いくさ終らねば墓へもまいらず。こうい

う志田も子細あって侍はやめたれども、安西の弾正太郎という

悪人を討つたぞ。敦盛の情がある、いや無常を観ずるなどと

しばらくして志田三郎が参詣してきました。熊谷蓮生坊が立ちあがり、

「やあ、志田三郎殿か。私は熊谷入道じゃ。命あればこそこうして会えるというもの。この

たびは力を落されたことである。ところで忠信や鷺尾はまだあらわれないのか、三郎

殿、志田殿」

と声をかけましたが、志田は全く返事をせず、静かにお参りをしているだけです。蓮生坊は

腹を立て、

「こりや、法師だと思つて知らぬふりをするか。奉加帳を頼むわけでもないのに、知らん顔をするな、ひきょうものめ」

と言いますと、

「ええ、うるさい。ひきょうものとはそなたのことではないか」

「この坊主をひきょうものとはなぜじゃ」

「侍はな、親や兄に死なれても、その死骸をおしのけていくさをするのを武士と言うのじゃ。忠信も鷺尾も継信の死んだのを悲しいと思つても、いくさが終らねば墓へもまいらぬ

のじゃ。こう言っているこの志田も、わけあって侍はやめたが、安西弾正太郎という悪人は討つたぞ。敦盛との情にひかされ、無常を

観じて、などと戦の最中に出家をするとは、これこそひきょうものではないか」

⑥事情。  
⑦平敦盛は一谷の戦で熊谷直実に討たれた。熊谷直実は十六歳の敦盛の潔い死に感じ、出家してその後を引つた。  
⑧人生のはかなさを思い知る。

①煩惱が捨てられず、迷っている人。  
②極楽往生を願って、仏道に入り徳行を積むこと。

③どんなにか。

④さとり。

⑤納得。

⑥ただちに念願を持ち、仏信仰の道に入ること。

⑦髪の頭頂に束ねたところ。または、その髪。  
⑧「肌ぬぐ」を強めた言い方。「肌ぬぐ」は、帯から上の衣服を脱ぐこと。  
⑨普通とは逆の持ち方。

⑩念仏を唱えるだけで、修行したのと同じく、極楽往生がかなう効果があること。  
⑪死後、極楽浄土に生まれること。  
⑫「身ながら（自分ながら）」か。  
⑬苦しみが多いこの世。  
⑭ほんのしばらく。

⑮おおいに勢いのある。  
⑯しかし。

て軍中より出家する。これは何と卑怯ならずや」

と言え、蓮生大手をたたいて、からからと笑い、

「こりや凡夫。無常を見ては後生に入り、強きを見てはしたが

えるをまことの侍とは申すなり。花のような敦盛をわが手に

かけて討ちしこと、なんぼうあわれに存ずるゆえ、侍やめて

出家すれば、その人も仏になり、わが身も仏果にいたるが、こ

れが合点がまいらぬか。こりや志田の三郎」

と言え、志田は一念發起して、

「ありがたし、ありがたし。もはや疑心は晴れたり」

ともどりふつつと切つて捨て、おし肌ぬいで太刀を逆手にと

りなおす。蓮生おしとどめ、

「これなにごと」

と言え、志田聞きて、

「念仏の功力にて往生せしと聞くからは、見ながら娑婆苦界に

片時も存へ何かせん。腹かきやぶり極楽へ早く往かん」

と言え、

「おお頼もしき大活の仏者かな。さりながらいかに念仏申して

と言いました。蓮生は手をたたいて、からからと笑い、

「こりや凡夫め。無常を見て仏道に入り、強きものにしたがうのをまことの侍というのじ

や。花のような若い敦盛をわが手にかけて討

つたことを心からあわれに思ったがゆえ、侍

をやめて出家した。そうすればその敦盛も仏

になり、わが身も仏果を得ることになる。この理屈がわからぬか、こりや志田の三郎」

と言いますと、志田は一念發起し、

「ああ、ありがたいこと。もはや疑問も晴れました」

と、もとどりをぷつりと切つて、肌をぬいで太刀を逆手にとつて切腹しようします。蓮生坊はおしとどめ、

「これなにごとじゃ」

と聞きますと、志田は、

「念仏の功力で往生したと聞いたので、わが身もこの世に長らえてもしかたのない身、腹をかきやぶり早く極楽へ行こうと思つてのこと」

と言いました。

「おお頼もしい、大活の仏者じゃ。が、いかに念仏しても、修行の功がなければ往生はな

りがたいのじゃぞ」

も、修行の功積らでは往生はなりがたし」

志田聞いて、

「誤ったり、誤ったり。しからばそれがし出家になり、継信が菩提をとぶらわん心なり。はやはや出家せさせてたべ」

法然聞こしめし、

「さてさて殊勝の心ざし。蓮生とてもその通り。しからば出家せさせん」

と、やがて授戒をなされける。すなわち志田坊とぞ申しける。

「いかに蓮生。継信があい果てしより、妻子が嘆きかれこれを見るにつけても、いとどあわれに候うは」

と涙を流し給いける。法然聞こしめし、

「嘆き給うも理なり。継信は君の御用に立ち死にしたれば成仏は疑いなし。いでいでとぶらいえさせん」

と、虚空に向って手を合わせ、

「門門不同八万四千、為滅無明果業因、利劍即是弥陀号、一声称念罪皆除、南無阿弥陀仏」

と唱え給えば、不思議や仏前に立てたる位牌、動く見えしが、

① 仏門に入るものに戒律を授けること。

② 空。

③ 「教行信証」二に見える言葉。「門門不同八万四千」は、仏教の法門には種々の相違があり、宗派も多数あるということ。「無明」は、真実にくらいことで、迷いの根本となる。「果」は生死の苦果、「業因」は「果」の原因。それらすべての苦を断ち切るのが「弥陀」の名号(「南無阿弥陀仏」)であり、これを唱えれば罪がみな除かれる、の意。

志田はそれ聞いて、

「ああ、早まった。では、私は出家になり、継信の菩提をとぶらおう。はやく出家させてください」

と言うのでした。

法然上人はこの次第をお聞きになり、

「さてさて殊勝な心がけじや。蓮生も同じこと。では、出家をさせてやろう」

と、すぐに授戒をさせてくれたのでした。出家後は志田坊と名乗りました。

「蓮生よ。継信が死んだと聞いて以来妻子が嘆く様を見るにつけても、ほんとうにあわれに思われたことじや」

と涙を流しました。法然はお聞きになり、「嘆くのはもつとも。しかし、継信は君の御用に立って死んだのだから、成仏は疑いない。さあ、とむらいをしよう」

と、空に向って手を合わせ、

「門門不同八万四千、為滅無明果業因、利劍即是弥陀号、一声称念罪皆除、南無阿弥陀仏」と唱えますと、あら不思議、仏前に立ててあった位牌が動くように見えました。そして、たちまち継信が姿をあらわし、

①「修羅」は、仏教で、阿修羅の住む争いの絶えない世界。その世界の苦しみ。

②心の迷いから、この世に深く執着すること。

たちまち継信が形をあわらわし、

「あら尊の御とぶらいや。ただ今の功力により修羅の苦患をまぬがれ、今は妄執晴れたり」

と、たちまち仏体とあらわれ、西の空へ飛び給う。ありがたしありがたし。

仏法繁昌み代繁昌。めでたかりともなかなか申すばかりはなかりけり。

「ああ、ありがたいとむらいでございます。ただ今の功力により修羅の苦しみをまぬがれ、今は妄執も晴れました」  
と言って、仏の姿になり、西の空へ飛んでいきました。ほんとうにありがたいことです。  
仏法は繁昌し、天皇の御代も栄えることでしょう。すべてはめでたく治まり、言う言葉もないほどでした。

尾口のでくまわし教材作成委員会

木越 治（金沢大学歴史言語文化学系教授）

道下 甚一（東二口区文弥人形浄瑠璃保存会会長）

中内 幹雄（深瀬のでくまわし保存会事務局長）

村上和生雄（白山市教育委員会歴史遺産調査課主査）

協力者

金 永昊（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程）

木越 秀子（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程）

丸井 貴史（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程）

工藤 志昇（金沢大学文学部）

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

## 門出八島

平成二十一年三月発行

編集 尾口のでくまわし教材作成委員会

発行 加賀の民俗文化財活用委員会

委員長 喜田 紘雄

石川県白山市殿町三十九

白山市教育委員会事務局歴史遺産調査課内

TEL 〇七六―二七四―九五八六

印刷 能登印刷株式会社 金沢市武蔵町七番十号